

王清穆『農隱廬日記』

王清穆研究会編注

解説

『農隱廬日記』は清末から民国にかけて活動した江蘇省崇明県の紳士、王清穆（字は丹揆。1860-1941）の日記である。上海図書館に所蔵されていたものを佐藤仁史が発見し、南京江南近現代史研究会（代表：高田幸男）で2006年から定期的に読書会「王清穆研究会」を開催して読解・整理作業を進めてきた。本会は現在は東洋文庫現代中国研究資料室の研究事業の一環となっており、南京江南近現代史研究会との共同開催という形になっている。本史料については読書会参加者の一人である小野寺史郎が紹介したことがあるため¹⁾、ここでは簡潔にその概要を説明する。

王清穆は光緒十六（1890）年に進士及第、総理各国事務衙門章京・戸部雲南清吏司正主稿・外務部推算司主稿などを経て、光緒二十九（1903）年に新設の商部右参議に抜擢され、光緒三十二（1906）年正月には商部右丞に昇進する。しかし袁世凱に疎まれたことで同年六月に直隸按察使に任ぜられて商部を離れ、同年十二月（1907年2月）に母が亡くなると官を辞し帰郷。以後は故郷の崇明を拠点に地方公益事業に携わった。1915年4月に父が亡くなると、崇明県堡西に庵を結んで「農隱廬」または「外廬」と名付け、ここに隠遁した。夫人は順に蘇氏・呉氏・金氏。王毓斌・王毓僑の二人の息子がいた。『崇明県志』（1924年完成、1930年増補の後出版）主修。文集として、門人の崔龍の編になる『農隱廬文鈔』（1939年）がある。崇明王氏の家譜としては『王氏支譜』（1864年）が存在する。

上海図書館所蔵の現在確認可能な王清穆の日記は全部で66冊、時期としては次表のようになる。ほぼ一冊に4カ月分が記入されている。ま

た 1930 年までは陰暦を使っているが、それ以降は二十四節気に対応した独自の暦法を考案し使用しているのが特徴である。

期間	冊数
1893 年 9 月 16 日 (八月初七日) ~ 1894 年 1 月 16 日 (十二月初十日)	1
1910 年 11 月 15 日 (庚戌十月十四日) ~ 1910 年 11 月 20 日 (庚戌十月十九日)	1
1916 年 6 月 8 日 (丙辰五月初八日) ~ 1921 年 10 月 4 日 (辛酉九月初四日)	14
1922 年 10 月 20 日 (壬戌九月初一日) ~ 1923 年 3 月 3 日 (癸亥正月十六日)	2
1923 年 6 月 14 日 (癸亥五月初一日) ~ 1923 年 9 月 27 日 (癸亥八月十七日)	1
1924 年 2 月 5 日 (甲子正月初一日) ~ 1925 年 5 月 5 日 (乙丑四月十三日)	4
1925 年 5 月 22 日 (乙丑閏四月初一日) ~ 1926 年 1 月 23 日 (乙丑十二月初十日)	2
1926 年 2 月 13 日 (丙寅正月初一日) ~ 1933 年 12 月 29 日 (癸酉仲冬二十三日)	24
1934 年 2 月 4 日 (甲戌孟春一日) ~ 1934 年 2 月 22 日 (甲戌孟春十九日)	1
1935 年 2 月 5 日 (乙亥孟春一日) ~ 1940 年 2 月 4 日 (己卯季冬三十日)	15
1940 年 10 月 8 日 (季秋一日) ~ 1940 年 11 月 15 日 (孟冬八日)	1

清末のものが断片的に残っているが、まとまった形で見られるのは 1916 年以降、死去前年の 1940 年までの部分である。とはいえそれでも 24 年に渡るこの日記がさまざまな面で非常に価値のある史料であることは間違いない。そのため今回上海図書館の了解の下、本史料を『近代中国研究彙報』上で活字化することとした。

ただ王は 1915 年に父の喪で帰郷して以降、しばらくは専ら晴耕雨読の隠遁生活を送っている。そのため、王の後半生の活動の中心となる治水事業、塩政への提言、減賦の請願などに関する記述が『農隱廬日記』に見え始めるのは総じて 1919 年以降である。そこでまずこの時期から取り上げることとする。

本号で掲載するのは「戊午十一月至己未四月」（1918年12月23日-1919年5月9日）・「己未四月至八月」（1919年5月10日-10月6日）の二冊分である。以下、この期間の日記の内容を簡単に紹介する。

農閑期ということもあり、1918年末から1919年初には専ら読書に関する記述が多く、ここから王の読書傾向を窺うことができる。『清稗類鈔』『涵芬楼秘笈』『国朝先正事略』などの抜書の他、序文の執筆や校訂の依頼（十一月二十五日・十二月初七日）、書籍の購入や受贈、『時事新報』や『中華新報』の記事に対する感想などが目立つ。

1919年1月に鄭立三（笠山）から『江蘇水利協会雑誌』を贈られ、江浙水利連合会の発起人となることを依頼されたことが、王が治水問題に関わる契機となる（十二月十一・十八日）。3月に江浙水利連合会の会長に推挙されると（二月十七・十八・二十一・二十二日）、『蘇州府志』（同治）や『明史』を参考書に治水に関する知識を集めている。また、当時の租界浚浦局の黄浦江河道整備計画に警戒を示した記述も見える（二月二十八・三十日・三月十三・二十七日）。5月に入ると江浙水利連合会の開催を準備（四月十七・二十日・六月初四日）、また江蘇省長齊耀琳に水利経費の支出を要求している（五月初一日）。そして10月1日（八月初八日）から翌日にかけて上海の呉江同郷会で蘇浙の紳士50人を集めて江浙水利連合会を開催、後述の減賦の件と合わせて政府に請願を行うことを決議している。

塩政に関しては、これ以前の1918年10月4日（戊午八月三十日）の日記に、塩商周湘舫が崇明の浙塩への「改食」を求めて来たことについて「地方利害、人情願否、全不顧也……徒滋紛更擾乱而已」と懸念する記述が見える。ただこの問題についての言及が大幅に増えるのは、1919年2月18日（正月十八日）の『時事新報』の記事を読んで以降である。これによって崇明の塩価の高騰を知ると、王は大総統徐世昌（商部時代の上司）に直接塩政の改善を求める電文を起草し（正月廿四・廿六）、県の紳士と協議の上、塩務署や省長にも淮塩への「改食」を求める文書を送付している（一月廿八～二月初一・初十・十六日）。これが拒絶されると（三月十九・二十一日）、今度は県の紳士500人で「公民大会」を開き、県長を通じて再び督軍・省長・塩務署に要望を提出することを決議している（五月初六・初七日）。しかしその後もこの問題は収束せず、塩巡が

郷民を射殺する事件が起こると、報復として浙商の塩棧を打ち壊すという謠言が崇明に広まる。王は督軍・省長に調査を願うとともに、人を派遣して郷民を説得させ、さらに自ら県の紳士とともに県公署に乗り込んで行政文書の調査を行い、黒幕と目された第一科主任の処分を督軍・省長に要請している（五月初二・十九～二十四・二十七日）。以後もこの問題の調査に派遣された官吏の応対に当たったり（四月初十・六月初一・初七・十一日）、在京の崇明出身者から直接政府に請願を行う計画を立てたりしている（六月初二・十七・二十七・二十八日）。

1919年3月24日（二月二十三日）に嘉興の盛亮周から『嘉興請減賦稅文牘』『均賦餘議』を贈られると、上海で長年の友人である唐文治（蔚芝）と蘇松常太杭嘉湖七府で減賦を請願することを検討。その後も唐を通じて浙江の紳士と連絡を取り（四月十四日・五月十三日・六月十五日・七月十四日）、北京に送る漕料の截留という手段をとり、直接北京に請願を行うことになる、発起人に名を連ね、請願文を校正している（六月二十二日・閏七月二十～廿三・廿六日）。

この時期の王は県外の問題に関しては基本的に『時事新報』から情報を得ていたようだが、当時の紙面を占めていたパリ講和会議の推移、国際連盟の組織などについても折に触れて言及しており、一定の関心をもっていたことがうかがえる。五四運動に際しては当初は学生の行動を当然としていたものの（四月初八日）、上海のストライキに対しては専ら商業的な損失を危惧する感想を書き残している（五月十二・十五日）。

この他、知人や親戚からの輓聯の依頼、私塾・小学校の経営（十二月十六日・正月十七・十九日・七月二十九日・閏七月初五・初十日）、錢莊や紡績工場の設立計画（正月初十・十一・廿四日・二月初三・十九日・閏七月初七日）、大生紗廠に崇明島に分廠を設けるよう要望したが股東会議で否決された（三月二十三日・四月初二・十一・二十五日）、といった活動に関する記述も確認できる。また様々な問題にコミットするようになってからも、農業や園芸、養蚕についての記載も散見される。平糶や社倉による米価の安定について検討した記述も見える（四月初四・初五・初九・十三日）。

子供に種痘を施したことや（三月十四日）、呉夫人の病死（六月初十日）、1919年夏に上海周辺で流行したコレラによる死者（六月二十六日・

七月初六・十九日）など、疾病や医療に関する記述も散見される。当時の知識人の中医・西医に対する考え方を知るという意味でも参考となるだろう。（小野寺史郎）

凡例

- ・原史料では正字と略字が混在しているが、活字化に当たり原則として常用漢字に統一した。
- ・句読点は全て活字化に際して付したもので、原史料には存在しない。書名の『』、文章名の「」も同じ。ただ（）記号は原史料の文中にもともと存在するので、そのまま写した。
- ・原史料にある訂正・加筆、割注、欄外の注記などは【】で示した。

農隱廬日記 戊午十一月至己未四月²⁾

【戊午】【冬至】十一月二十一日甲辰星期一陰微晴 四十五度
冬節祀 先。

十一月二十二日乙卯【巳】星期二晴夜小雨 四十三四度
愈曲園³⁾嘗論醫之不足恃，謂，有病不治，恒得中医。賈公彥引此入『周礼疏』⁴⁾，非惟古諺，直是經義矣⁵⁾。按中医之説，蓋不治而癒者，十得其五之謂也。

十一月二十三日丙午星期三小雨陰 四十五六度
『清稗類鈔』紀，何義門⁶⁾篤志於学，其読書也，繭絲牛毛，必審必核。吳下多書估，輒從之訪購宋元旧槧及故家鈔本，讐正之。一卷或數十過，丹黃稠疊，謂必如此而後知近世之書，脱漏【譌】謬，読者沈迷於其中，而終身未曉也⁷⁾。按邑志「義門先生伝」太略，宜采李次青『先正事略』⁸⁾補輯。此段『事略』中亦有之。

十一月二十四日丁未星期四陰雨夜微雪 四十五六度
昨丹臣⁹⁾自南沙収倉婦裝回穀五十餘石，連前共一百五十石。棉花共

五百五十餘斤以外，完折色者約二百餘元。友琳來訊，北沙租入才得七成。

十一月二十五日戊申星期五晴 四十二三度

壽民弟¹⁰⁾寄來『綱鑑摘要』四冊，係從『涑水』¹¹⁾，『通鑑』¹²⁾，『紫陽綱目』¹³⁾及『綱鑑易知錄』¹⁴⁾摘出，并自著「序文」一篇，屬余商定。

十一月二十六日己酉星期六晴 三十九度

大女¹⁵⁾自南翔來。萃拔¹⁶⁾以胞弟喜事，十一回家，原約十八來，以雨阻，今日傍晚來。

十一月廿七日庚戌星期日晴 三十七度

常熟毛子晉好刻書，髫齡即有『屈陶二集』之刻。客有言於其父盧吾者曰，公括據半生，以成厥家，今有子不事生產，日召梓工弄筆，不急是務，家殖將落。母戈孺人解之曰，即不幸以鉅書廢家，猶賢於擄菟六博也。迺出囊中金助成之，書成而雕鏤精工，字絕魯亥，四方之士購者雲集。於是向之非且笑者，轉而歎羨之矣。子晉居鄉好行其德，篤於親戚故旧，歲饑則振穀代粥，周隣里之不火者司李雷雨津賦詩贈之曰，行野漁樵皆拜賜，入門僮僕尽鈔書。見之者皆謂為實錄¹⁷⁾。按子晉能善用其財而母氏戈又賢而有識得不謂之難能可貴者乎。

十一月廿八日辛亥星期一晴 三十七度

已刻，余在西廂書室以僮僕取物，忽患閃腰，至午後酸痛益劇，不能行動。

十一月廿九日壬子星期二陰 四十一度

函託沈雲扉¹⁸⁾配製外治藥水。

【陽歷一月一日】十一月三十日癸丑星期三陰 四十三度

傍晚，藥水取到。搽擦腰部，略覺舒展。

十二月初一日甲寅星期四陰 三十五度

統擦藥水數次，腰際漸漸鬆動，一人扶掖，一手支杖，可以緩步而行。想見老人之有需乎杖，足以助力不尠。

十二月初二日乙卯星期五晴 三十五度

大女進城。

十二月初三日丙辰星期六晴 三十八度

今日不需人扶掖，一手支杖，亦可行動矣。

十二月初四日丁巳星期日晴 四十度

『清稗類鈔』紀，阮文達撫浙時，其門生有入都會試者，偶於通州逆旅，購一餅充饑，見其背斑駁成文，戲以紙搨之，絕似鐘鼎銘，即寄文達。佯言某於通州古董肆中，見一古鼎，惜無資不能購，某亦不知為何代物，特將銘文拓出，寄請師長，與諸人攷訂。文達得書，即集諸名士互商。諸人臆為擬議，皆不同。最後，文達乃指為『宣和圖譜』中之某鼎，即題跋於後，歷言某字某字皆與『圖譜』相合，某字因年久銘文剝蝕，某字因搨手不精，故有漫漶，實非贗物云云。門生見之大笑¹⁹⁾。按收藏家鐘鼎彝器動以博古相尚，實則真贗雜陳，鑑別不易，文達之受欺，不足怪也。

【小寒】十二月初五日戊午星期一晴 四十三度

阮文達予告歸，搜羅金石，旁及鐘鼎彝器，一一攷訂，自誇老眼無花。一日，有以折足鐺求售者，再三審視，鐺容升許，洗之，色綠如瓜皮，大喜，以為此必秦漢物也，以善價得之。偶讌客，以之盛鴨，藉代陶器。座客摩挲嘆賞，文達意甚得也。俄而鐺忽訇然有聲，土崩瓦解，沸汁橫流，恚甚。密拘其人，至鍵之室，命每歲手製贗鼎若干，優其工價。此後贈人之物，遂無一真者²⁰⁾。按文達以己之受人欺而乃專造偽物以欺人，不可謂非賢者之過。吾無取焉。

十二月初六日己未星期二晴 四十五至四十八度

報載，內務部請以顏元，李恭從孔子廟奉命【令】照准²¹⁾。按，顏字習齋，博野人。李字剛主，蠡泉人。顏師也，李弟也，皆操履篤實，不尚空

談。当路以兩先生從祀，殆有救時之意歟。

十二月初七日庚申星期三陰 五十至五十三度

為『錫山周氏重修宗譜』撰序文一篇²²⁾，從舜卿²³⁾之請也。舜卿以商業起家，余甲辰至滬認識之。是年夏，以錫之蚕桑甲蘇屬，往觀繭市，舜卿邀余過其里，登其堂，而乃知其有大過人者。建家祠以尊其祖，置義莊以贍其族，立學校以惠其鄉，犖犖數大端，在賢士大夫且不能為，或欲為之而心有餘力不逮者，比比皆是。舜卿獨能於經營商業之餘，斥其私財，次第成之。今又競競於修譜一事，如舜卿者，可謂賢矣。

十二月初八日辛酉星期四陰夜小雨 五十一二度

大兒毓斌²⁴⁾久無訊來，寄書詢之。

十二月初九日壬戌星期五陰小雨 五十一度

善化鄉賢李恒齋先生，學以朱子為歸，於書無所不讀。嘗言，不察二氏之所以非，安知吾儒之所以是。不觀諸子之有純有駁，安知吾儒之醇乎其醇。不審秦漢以下之成敗得失，安知三代以上帝德王猷之尽善尽美²⁵⁾。按此，必胸有主宰，非泛覽群書可比，足為後學師法。恒齋名文昭，字元朗。

十二月初十日癸亥星期六陰小雨 四十九度

侯官鄉賢謝退谷先生金鑾，學以四子書為綱，五經為輔。篤好胡東樵，顧復初，任荆溪，方望溪四家之書，謂，其博通傳註而有所領悟折衷，使學者可以修諸身，而見諸用。其他攷據家喜搜求古書，鬥新博。以語修己致用之方，則無術焉。謂之經學則可，不足以語經術也。吾於經術之言，獨取胡，顧，任，方四家者，以四家說經皆汲汲於倫常日用，而非訓詁鈔錄者也²⁶⁾。按此，足為讀書選摺之法。胡東樵渭字拙明，德清人。顧復初棟高，字震滄，無錫人。任荆溪啓運，字翼聖，宜興人。方望溪苞，字靈皋，桐城人。

十二月十一日甲子星期日晴半陰 四十五度

鄭君笠山²⁷⁾自上海來，以所輯『江蘇水利協會雜誌』三冊見贈，並言近

以注重太湖水利，擬聯合浙西設一江浙水利協會，邀余參列發起人。事閱地方公益，許之。晚留宿。

十二月十二日乙丑星期一陰 四十一二度

笠山回滬。常熟陳亦韓先生祖范，試禮部中式。同邑蔣文肅，廷錫方為大學士，語之曰，子有盛名登甲榜，而某又在朝，今歲大魁非子而誰。先生默然趨出，即辦裝南下。語人曰，無使他日以我為依附權門，遂不與殿試。按文肅意在見好，未免失言。而先生風節凜然，百世下猶可想見，可敬也。先生謂，『論語』賢賢易色，主夫婦而言。賢賢如「閔雎」之淑女好逑車轄之令德來教好德，非好色。故云易色也。造端夫婦，其理甚大，若賢人之賢則交友一倫，已括之矣²⁸⁾。按此解，極精確合理，與西河毛氏之攻擊朱註者不同。

十二月十三日丙寅星期二陰雨 四十三至四十五度

吳興張翰伯先生為沈君衡山之妻父，頃接訃，悉十月中作古。撰聯挽之。云，仰声名逾三十年，奈何吳下耆英又弱一個。遺著述得六七種，更有繼龕詩草並足千秋。

十二月十四日丁卯星期三陰 四十五度

嘉定王西莊先生鳴盛與其妹壻錢竹汀先生，於乾隆十九年同捷南宮，入詞林，官至內閣學士兼禮部侍郎銜。以典試還朝，坐濫用馭馬，左遷光祿卿，尋丁內艱歸，遂不復出，槌戶讀書。偃仰自得者，垂三十年。錢官至少詹事，督學廣東，旋丁父憂歸，即引疾不出。歸田三十年，歷主鍾山，婁東，紫陽書院²⁹⁾。兩先生出處同，淡於榮利亦同。王著述，以『尚書後案』，『周禮軍賦說』，『十七史商榷』，『蛾術編』為最著。錢著述，以『廿二史攷異』，『遼金元三史拾遺』，『元史氏族表』，『十駕齋養新錄』，『潛研堂詩文集』為最著。

十二月十五日戊辰星期四陰半晴 四十五度

張楊園先生謂，學者舍稼穡，別無治生之道。能稼穡，則無求於人，而廉恥立。知稼穡艱難，則不敢妄取於人，而禮讓興。廉恥立，禮讓興，而世道可以復古矣。故其所補農書，皆得諸身試者³⁰⁾。按先生恪守紫陽居敬

窮理之訓。平湖陸清獻公未獲相接，及見先生遺書，乃心折焉。

十二月十六日己巳星期五晴 四十五至五十一度

塾師以年假解館，作筵餞之。

十二月十七日庚午星期六小雨巨風 四十八九度

整屋李二曲先生顛，字中學，以昌明閔學為己任。嘗言，學者當先觀象山，慈湖，陽明，白沙之書，闡明心性，直指本初以洞斯道之大源，然後取二程，朱子及康齋，敬軒，涇野，整菴之書，玩索以盡踐履之功。否則醇謹者，乏通慧穎悟者，雜異端，無論言朱，言陸，皆於道未有得也³¹⁾。按先生之學，不立門戶，持論甚正，可以為法。

十二月十八日辛未星期日陰 三十八九度

萃拔，南榮³²⁾均回家。鄭笠山寄來『導淮預測圖』四幅。

十二月十九日壬申星期一晴 三十三度

陳生尚高自日本東京慶應大學訊寄『薄荷栽培及製造法』一冊³³⁾。

【大寒】十二月二十日癸酉星期二陰午後雪寸許 三十三度

施生調元³⁴⁾來。搏九代購『涵芬樓秘笈』三，四，五，六集四套³⁵⁾，『朱子論語集註墨蹟影本』一冊，『錢南園墨蹟影本』一冊，均於今日寄到。

十二月二十一日甲戌星期三晴 三十三度

明洪武十五年，頒禁約於天下學宮，刻石於明倫堂，謂之臥碑，計十二款。清順治九年，禮部題奉欽依條約八款，謂之新臥碑。明臥碑第二款云，天下利病，諸人皆許直言，惟生員不許。新臥碑第七款云，軍民一切利病，不許生員上書陳言。如有一言建白，以違制論，黜革治罪³⁶⁾。想見專制時代鈐束士子之嚴，與八股取士之所以籠絡人才，相為表裏。

十二月二十二日乙亥星期四小雨 三十七至四十度

接大兒訊，悉一月內外曾寄家書三次，而此間皆未收到。郵局不可恃，殊可恨。然余頗疑為中間私揭郵票所致，因函屬毓斌於粘貼郵票後，加蓋騎

辺小図章，以杜其弊。

十二月二十三日丙子星期五小雨 四十一度

明永樂初，解縉等采經，史，子，集，百家，天文，地志，陰陽，医卜，僧道，技藝之言，輯為一書，上之賜名『文献大成』。既而上覽其書，更多未備，復命姚広孝等重修。至五年，始成。凡二萬二千二百一十一卷，一萬一千九十五本，更賜名『永樂大典』。此書後竟以卷目太繁，不及刊布而廢³⁷⁾。是知清大内及翰林院所藏『永樂大典』，皆残缺写本耳。

十二月二十四日丁丑星期六陰 四十度

閩中陳怡山『海濱外史』³⁸⁾紀，明代及清初科場之弊甚悉。大抵考官則閏節賄壳，士子則伝通傭請，無所不有。案發，動遭刑戮，而覆轍相尋。亦可怪已。

十二月二十五日戊寅星期日陰 四十度

大兎毓斌托樊衡平寄來法製黑豆，鹿角膠，葡萄乾，狗皮膏等物。

十二月二十六日己卯星期一陰 三十九至四十一度

調元接嗣母訃音回家。南榮來。潘濟之丈寄示韓藹堂先生近作七律四章。先生為光緒朝名幕，吾邑兩次築海塘，適先生在蘇撫幕中，力主奏請，撥款籌辦。詩中亦詠及之。先生實有功於吾崇者，不可忘也。

十二月二十七日庚辰星期二晴半陰夜小雨 四十二度

常熟水利者，有用湖不用江之說。金君天翻謂，白茆既開，宜封塘以免渾潮之侵入。一旦淫霖巨浸，三江之水不能東洩太湖之漲，則開北戸以減之。此陶文毅公之往績可師者也。不封塘，則清弱渾強，不數年而其功將廢矣³⁹⁾。自足稱知利害之言。

十二月二十八日辛巳星期三小雨 四十一二度

今日為 先妣忌日。余便帽不帶貂皮，猶旧日服素之意也。

十二月二十九日壬午星期四陰夜雪 四十度

常熟龐君樹典「江南水利計畫說略」⁴⁰⁾，條貫井然，可資攷核。原稿經袁君承曾⁴¹⁾刪削訂正，刊入『江蘇水利協會雜誌』。

十二月三十日癸未星期五陰微雪 三十六七度

年節祀 先。戌刻，懸掛 喜神，安排一切供品，就寢已子正矣。

【己未】【陽歷二月一日】正月初一日甲申星期六陰夜雪 三十四度

晨起拜 祖先。午膳後，觀內子⁴²⁾演『益智圖』。此為娛樂品之清雅者，然亦須心思靈敏，方能為之。余偶演之，往往不如內子之敏捷。

正月初二日乙酉星期日陰夜微雪 三十三度

灌雲武君同拳「江北行水今昔觀」⁴³⁾係從『行水金鑑』⁴⁴⁾中掇其概要，証諸現勢加以說明，而於導淮言之尤詳。是武君固今之留心水利者也。囿房及校舍今日上梁。

正月初三日丙戌星期一晴半陰 三十三度

陶甫⁴⁵⁾，搏九來，留午膳而去。申刻，拜 喜神敬謹収下。

正月初四日丁亥星期二晴 三十二三度

皖北測量局宗君嘉樂「治水芻義」⁴⁶⁾雖為皖之水利計，而淮河則與蘇之江北有闕，宗君尤主張睢，淮分治，以睢為淮北巨川，當分不當合也。

【立春】正月初五日戊子星期三晴 三十二至三十四度

南榮回家。午後，賓九⁴⁷⁾來。日本自德意志瓦解以來，民主思想益蓬勃不可遏。新聞雜誌幾無日無冊不有民主政治之議論。日人因民主二字有與君主對待之嫌，特避而用民本二字。客蠟，法學博士吉野作造等組織黎明會，氣焰甚盛，大有不可嚮邇之勢。語云，礎潤而雨，月暈而風。日本之前途亦略可推測矣⁴⁸⁾。以上見本日『時事新報』。

正月初六日己丑星期四陰夜雨 三十六七度

龔萬之偕富民鎮朱少謙來，留午膳而去。汪同年蘭楣⁴⁹⁾在京作古，撰

【挽】以聯，云，悵故人無疾而終，天上游仙尋伯仲，仰累世貽謀之善，君家後起蔚賢才。

正月初七日庚寅星期五雨夜雪 三十九四十四度

張君相文「導淮一夕談」謂，川澆大變，莫甚於河淮之合一，中原之形勢既殊，種族之衰兆亦見，真前古後今一大關鍵也⁵⁰。此言良是。蓋淮之淤塞，由於黃河南徙。宋金以來，幾及千年，奈導淮之舉，至今未得實行。可慨矣夫。

正月初八日辛卯星期六晴 三十九度

宗君嘉祿「淮河路線議」所述，有主入江者，有主射陽，新陽各口分洩者，有主【黃河】旧槽入海者，有主由灌河入海者，議論紛紜，久而未決⁵¹。余謂，宜籌入海者為幹，入江者為支。若使全淮入江，斷非所宜。

正月初九日壬辰星期日雪 三十八度

嘉定農會副會長朱俊有條陳改良種桑種棉種稻種竹等法，見一八二七期『省公報』。此間農事可資參攷。

正月初十日癸巳星期一晴 三十七八度

徐君止畝自南通來，擬在橋鎮設一錢莊，集股以三萬元為額，推江都謝君子清為經理，以其在南通辦錢莊頗著成績也。今日約謝同來，留宿。

正月十一日甲午星期二晴 三十八至四十一度

止畝屬余題錢莊字號，余為擬福瀛二字。午刻，徐，謝二君赴堡口，附輪進城，將至橋鎮，相度房屋。余函致壽民，冠生兩弟，與之接洽。

正月十二日乙未星期三晴半陰 四十一至四十三度

聞壽民弟得孫，可喜之至。

正月十三日丙申星期四晴 四十三度

江北水利全以閘壩為關鍵。瓜清運河直貫淮揚，計程六百餘里，即吳之邗溝也。其於今日尚稱為完全水道賴以稍洩淮，泗，沂之漲而下河。各渠藉

東岸之涵洞壩閘五十餘座，潦則堵閉以防侵灌，旱則啓放以資灌溉，亦有水利可言。近年河底日墊日高，水流將瀾，不亟補救，恐僅僅之利亦奪⁵²⁾。以上見「張齋老⁵³⁾癸丑導淮計畫宣告書」。

正月十四日丁酉星期五晴 四十三四度

張君勸論，南洋華僑所當注意者，不僅在生計與教育。略謂，英人以馬來半島為經營東方保障印度之要區，其不容吾國主權行使於南洋，有斷然者。吾族之受人統治，蓋亦勢之無可逃者。然殖民地受人統治，不可視為國恥。譬之加拿大，英之屬地也，然其大半人民則為法人。豪洲美國等處，亦不僅為英美之民族。然法人等雖受治於英美政府，而不失其宗教國語之自由，且得參政之公權。此則吾人所當以為模範者也。吾僑民之流寓海外者，除豪洲美洲之五十萬，暹安之三百五十萬暫置不計外，英屬之二百萬，荷屬之三百萬，當取法加拿大之法人，不僅為所在地之寓公，當爭得一公民之地位。此則吾華僑所當自覺者也。然欲得公權，其事非易，必先養成僑民之技能，增進其智識，則公民之基礎立矣⁵⁴⁾。張君此論，所以啓迪華僑者甚至。然今日所當籌及者，要在擴充教育，保護生計而已。【原文見昨日『時事新報』。】

正月十五日戊戌星期六晴 四十四至四十八度

美總統威爾遜提倡國際同盟，已在巴黎擬就草約，欲使世界此後不再發生戰事⁵⁵⁾。洵從古未有之盛舉也。不識各國果能踐此盟約否也。

正月十六日己亥星期日陰 四十五度

海門陸漱霞作古，挽以聯，云，一鄉稱善人，噩耗驚傳，怕聞隣笛。五子皆好學，義方率教，能誦楹書。

正月十七日庚子星期一陰半晴 四十三至四十五度

日前約率拔十六開館，以患病初癒，故今日來余請其稍事休息，改期十九開館。

正月十八日辛丑星期二陰半晴 四十三至四十五度

南榮來。塩為調和飲食必需之品。吾國食塩向分引界，本非善政。惟塩法

未改，引界未破，不得不各守範圍。湘省為淮鹽引地，上年以淮南產絀，借運東蘆之鹽，以濟民食。今淮南，濟南產數月增，存場存棧壅積至一千餘萬担。而湘岸票商仍借蘆鹽運銷，致淮南場商煎丁同感疲困，請求取消借蘆之案，以保引岸。不知湘岸運蘆鹽，成本輕，售價昂，獲利厚，不但湘商利之，官斤亦有分其利者，誰復顧淮南鹽商竈丁之困苦耶⁵⁶。【有兩電見十六，十七『時事新報』。】

正月十九日壬寅星期三陰 四十三度

巳刻，送館兒⁵⁷上學，東隣沈家來一學生，年九歲。未刻，設席譙塾師。適廟鎮布廠黃楚楠，朱文煥來，邀與同座。

【雨水】正月二十日癸卯星期四陰 四十二三度

黃，朱二君，午膳後去。

正月廿一日甲辰星期五陰小雨 四十三度

報載十八日禁煙令一通，大致謂，正本清源當以禁種為先，而於販運吸食如何懲治，不置一詞。不知有吸食者而後販運有利，有販運者而後種植有利。不嚴治販運吸食而斤斤於禁種，其成效亦可視已。張君一鵬⁵⁸監視焚土後曾擬積極辦法，略云，暫行新刑律第二十一章鴉片煙罪十條對於製造販賣及吸煙等罪規定過輕，殊非刑亂用重之道製造販賣者其刑期最高度僅至三等，而開設館舍供人吸食及吸食鴉片煙者，其刑期最低度僅至拘役。立法過寬，人民易生沉泄，不得不嚴定加重專條以救其弊，擬請援照懲治盜匪法，特定一懲治鴉片煙罪法，務使國民懍於重刑，而煙害無復傳播等語⁵⁹。按明令因此呈文而發，並未採用。聞居高位而吸煙者甚多，政府其不免有所顧忌乎。

正月廿二日乙巳星期六陰

午後，過搏九處，晤菴庵⁶⁰略談。三時，上朝陽船⁶¹。五時半，進城。

正月廿三日丙午星期日晴

立先⁶²，象先⁶³昆季，亞鄒⁶⁴先後來談。午刻，赴黃宅送葬，出西門而回。酉刻，至壽民弟處晚餐。張鷺翹⁶⁵，偉人叔姪，施閏秋⁶⁶，龔少莘，

錢樂丈⁶⁷⁾，黃伯鈞，冠生弟，均在座。讌罷又問談許久而散。

正月廿四日丁未星期一晴

午刻，詣黃宅，詠先姻伯靈前行禮，並為題主，挽以一聯，云，惟公高隱而享大年，方期耄耋健康，梓里聯歡同介壽。有子遠游以興實業，可奈閩河間阻，椿庭失蔭痛奔喪。申刻，至昌大公典，會議福瀛錢莊租借房屋事。孫友琳來，詢悉外沙細鹽貴至每兩十文，實屬駭人聽聞。

正月廿五日戊申星期二晴 四十五六度

寄張地山，徐止畝訊，託張伯陶帶南通。午刻，返堡西，接止畝兩處【次】來訊，再覆之。

正月廿六日己酉星期三陰 四十六七度

為本邑食鹽事呈大總統一電，云，崇明鹽課攤入地丁，不設商引，向食本竈及通泰場鹽。今浙運司准浙商來崇推銷。浙引既違舊例，尤損民情。況浙商惟利是圖，賤取東鹽充作浙鹽貴賣，市價昂至每斤九十文。偶售淮鹽者，昂至每兩十文。荒謬至此，不釀成禍亂不止。穆等為國課民食雙方兼顧計，擬請豁除帶徵鹽課，仍食本竈及通泰完課之鹽，由通屬場長設棧分銷，改歸兩淮運司管轄，以順輿情而絕禍源。乞飭鹽務署詳查妥辦，地方幸甚。

正月廿七日庚戌星期四陰晚小雨 四十八九度

祝筠青第四子歿，年三十有一。挽以聯，云，似此英年，樂有父兄叩蔭庇。胡為短命，竟無藥石起沈疴。復止畝訊，言福瀛房屋宜速來酌定。

正月廿八日辛亥星期五陰 四十八九度

寄賓谷⁶⁸⁾訊，言鹽務公呈不宜再遲，速催吟秋⁶⁹⁾屬單。

【陽歷三月一日】正月廿九日壬子星期六陰小雨 四十八九度

寄地山訊，附電稿，請其與通屬場長韓君接洽。

二月初一日癸丑星期日晴 四十八至五十度

吾崇尚本產鹽。宋嘉定十五年，設天賜場，隸通州。元至元十四年，立為崇明州，隸挹州路。明洪武八【二】年改為縣，【八年改】隸蘇州府。清雍正二年，以太倉陞為直隸州，崇明改隸太倉。而鹽場則自宋迄於明之嘉靖，歷三百四十年，皆屬於兩淮。至嘉靖三十六年，改屬兩浙鹽運使，自改屬兩浙迄於今，又歷三百六十四年。攷諸歷史地理諤，以今日形勢謂，宜改歸兩淮，毫無疑義。

二月初二日甲寅星期一陰雨 四十八至五十度

南北和議有決裂消息。南代表已通電宣言停止和議，以催促陝西停戰，未有答復也⁷⁰。

二月初三日乙卯星期二陰雨 五十度

地山函，述徐，謝爭福瀛總理，竟至決裂。以此見朋友以利相結合，仍當尊重道義，不然必無幸也。因請地山另行物色相當之人。

二月初四日丙辰星期三陰雨 五十度

美国人好勞動而卻又富於娛樂之趣味。公園之多，甲於寰宇。湯濟武⁷¹謂，自吾人之心理思之，則以為富於娛樂趣味者必好逸惡勞，而美人不然。此種矛盾心理實為美国国民性優點之一云⁷²。見昨日『時事新報』載湯之遺墨。

【驚蟄】二月初五日丁巳星期四陰 五十度

美国人富於個人獨立性而卻又厚於社會公共心。個人愈發展，社會亦愈進步。若就普通心理言之，則個人主義強者，其公共觀念必弗強，而美人不然。此種矛盾心理亦為美国国民性優點之一云⁷³。見昨今兩日『時事新報』載湯濟武遺墨。按『大學』言明德新民⁷⁴，『中庸』言成己成物⁷⁵，『論語』言欲立立人，欲達達人⁷⁶，『孟子』言獨善兼善⁷⁷。吾國聖賢立教忠恕本屬一貫，是個人主義與公共觀念無所謂矛盾也。專重個人主義者近於楊，反之而偏於公共觀念者近於墨，皆悖乎孔子之道者也。

二月初六日戊午星期五陰 四十九至五十一度

世界今日美国学校之多，為全球冠。全国男女幾於無人不学，是以近数年間美国科学之進步，大有一日千里之勢。科学愈進步，社会亦愈發達⁷⁸⁾。觀此可知，国之昌盛以興学為本也。

二月初七日己未星期六陰早晚雷雨 五十一至五十三度

南北和議停頓，前途困難正多。論者謂，南北即能言歸於好，而來日之患未已也。一在督軍制之不易廢除，一在游民之無法安置，恐政府專事粉飾敷衍，尚何統一之足云⁷⁹⁾。

二月初八日庚申星期日陰微晴 四十二至四十七度

湯濟武謂，科学與宗教，絕對不能相容。科学興則宗教亡。故富於科学的研究性者，必薄於宗教的信仰心。而美人不然。此種矛盾心理，亦為美国国民性優點之一云⁸⁰⁾。

二月初九日辛酉星期一晴 四十一二度

接南翔金宅訃条，驚悉子廉親家作古，不識何病，遽爾不起。明日大殮，因函託少農代辦香燭致送。

二月初十日壬戌星期二陰雨 四十三至四十五度

余擬呈塩務署文一通，寄賓谷招人繕写，俟簽名後寄京。又撰「崇明塩区応婦兩淮議」一篇⁸¹⁾。

二月十一日癸亥星期三陰半晴 四十五六度

湯濟武謂，美人以性急之国民見称於世，事事皆求迅速，不外由尊重時間之觀念。吾国先聖有言，無欲速，欲速則不達。蓋凡事只求速成，必至苟且了事，不能收最終之效果。而美人不然。一方事事求迅速，一方卻有堅忍遠大之精神。此種矛盾心理，即為美国国民性優點之一云⁸²⁾。

二月十二日甲子星期四晴 四十五至四十八度

報載周鳳岐改良軍制意見。略謂，今日之軍隊非国家之軍隊而為私人之軍隊也。自袁世凱小站創練新軍，教官練兵，清廷授以全權，袁氏得以国家

之祿位為收攬部下人心之具。積以年歲，北洋軍隊祇知有袁宮保，不知有清廷。識者早為清危迫，既利用其軍隊而為總統，後益發揮其方法，擴張其權力，推倒民黨，而其效大顯。不特其北洋派中師承有自，互相則倣已也，各省之相繼效尤者，亦比比皆是矣。為今之計，惟有將私人之軍隊化為國家之軍隊而已⁸³⁾。斯言極為中肯，令人追想清季當軸謀國之誤，且遺害無窮也。

二月十三日乙丑星期五陰雨 四十六七度

擬挽金子廉親家一聯，云，傷逝年浮生，何去年趨晤數言，竟成永訣。貽謀能迪後，即平日儉勤兩字，便是良箴【義方】。

二月十四日丙寅星期六晴半陰 四十八至五十三度

有高維崑者撰「我之鐵路統一觀」一篇，見『時事新報』。略謂，統一鐵路之利益，約有四端。一可以促全國鐵路之速成。一可以剔除局站之中飽。一可以振刷路政之腐敗。一國防路線，亦即商業路線，不至於重彼而輕此。要之，統一鐵路，在破除各國之勢力範圍，藉泯將來國際間無數紛爭，即不啻為國家加一層保障，數載以來，吾國人食息於門戶開放機會均等八字之下，實亦不必諱言，而某國必今日要求某路建築權，明日又要求某路建築權，吾當局幾窮於應付。其反對統一政策者，恐為某國所利用耳⁸⁴⁾。所言頗中肯綮，余甚韙之。

二月十五日丁卯星期日晴半陰 五十至五十三度

『時事新報』轉載中美新聞社「五年來之中國鹽政」一則，內有云，現在講究鹽法改良之人，均知政府應使人民時時得價廉物美之鹽，如是可以增加鹽稅，減少私鹽。而欲達此目的，最好自由運鹽，廢止一切限制，因以前鹽商僅能在特定一地售鹽之制度，將來必須廢除等語⁸⁵⁾。外人議論明達，如是可以愧吾國之管鹽務者矣。

二月十六日戊辰星期一晴半陰 五十至五十三度

寄渭漁⁸⁶⁾訊，託代遞鹽務署公呈一件，又寄南京省長備案公呈一件。

二月十七日己巳星期二晴 五十三至五十五度
江浙水利協會來電，稱推余為會長。亟以快郵辭之。

二月十八日庚午星期三晴 五十三至五十五度
遜庵自上海來，並出示江浙水利聯合會同人公函，必欲邀余赴滬一行，副會長已推定沈思齊⁸⁷⁾，潘澄鑑⁸⁸⁾二人。察其情勢殆不可卻，遂許以廿一到滬云。

二月十九日辛未星期四晴半陰 五十至五十三度
春節祀先。申刻，杜少如⁸⁹⁾，龔澧丞⁹⁰⁾來，謂將就本地創設紡紗機廠云。

二月二十日壬申星期五晴半陰 五十三至五十九度
有稱南園者論「毛西河駁四書集註之謬」，言極平允。略云，朱子『四書章句集註』研究文義期於愜理而止。原不以攷証為長。毛奇齡學博而好辨，遂旁采古義，以相詰難，『論語稽求篇』四卷，其中有強生支節者。『四書剩言』四卷補二卷，亦不免支離曼衍，不顧其安云⁹¹⁾。見十七日『中華新報』。

【春分】二月二十一日癸酉星期六陰
偕遜庵赴滬，寓振華旅館。訪潘君芸生於大行台，承以『浙西水利議事會年刊』一冊見贈。【晚浙西水利會員全體招宴於東亞酒樓，吾蘇會員數人亦在座。】

二月二十二日甲戌星期日雨陰
午前，訪黃伯雨⁹²⁾，鄭笠山。午後，借座一枝香會議，將江浙水利聯合會簡章，辦事細則，經常臨時預算案，寧杭滬通訊處辦事細則等件，逐一通過。晚，吾蘇會員即就原處公讌浙西【會】員。

二月二十三日乙亥星期一陰
訪舜卿，留余午膳，旋借伊馬車詣蔚芝⁹³⁾，長譚。昨嘉興盛君亮周⁹⁴⁾遺余『嘉興請減賦稅文牘』一冊⁹⁵⁾，『均賦餘議』一冊⁹⁶⁾。蔚芝亦曾見此以

為蘇松常太困於重賦情形，與嘉杭湖相等，宜聯絡七屬之人，請求政府減免漕糧。持論甚正，余深聽之，並承以『大學新讀本』一冊⁹⁷見贈。晚，芸生招飲於一枝香。

二月二十四日丙子星期二雨晚晴

午刻，訪劍秋⁹⁸約在小有天園菜館午膳。晚，紹興徐君季生偕遜庵約在一枝香。徐君蘭墅⁹⁹約在倚虹樓。座中皆有王君幼山¹⁰⁰，係新自都門來者。

二月二十五日丁丑星期三陰晚雷雨

宝山臬知事張藻翔允高¹⁰¹為伯訥¹⁰²同年之弟，有調署吾邑之信。適亦寓振華旅館，遜菴，劍秋在倚虹樓邀之午膳，并招余作陪。晚，余約芸生，季生，笠山，蘭墅，劍秋，宝山金巨山在倚虹樓小叙。遜菴未到。

二月二十六日戊寅星期四陰小雨

巳刻，偕遜菴，劍秋上朝陽船。申刻，返堡西外廬。蘇五屬改食淮鹽研究会，無錫等臬議事會，皆以改食淮鹽請省議會提議¹⁰³。見前昨兩日『中華新報』。

二月二十七日己卯星期五陰 四十五度

北京大學校長蔡子民答林琴南書，有君臣一倫不適於民國，可不論等語¹⁰⁴。余竊以為不然。古者，天子諸侯及卿大夫之有地者皆曰君，見『儀禮』注¹⁰⁵。凡所統屬曰臣。王臣公，公臣大夫，大夫臣士，見『左傳』¹⁰⁶。自封建之制廢而君臣二字縮為狹義者，幾千年矣。今共和國家既舉一人為總統，証以古義，則總統便是君，內閣總理為全閣之君，各部總長為各部之君，外則省長為一省之君，師長為一師之君。推之，一庁一局一學校一公司，凡為之長者，皆君也。其所屬之職員，皆臣也。孟子曰，君臣有義¹⁰⁷。未有不義而可與共事者也。亦非朋友一倫理所得而概括之也，明甚。蔡君偏好新學，謂五倫可去其一，未免失言。

二月二十八日庚辰星期六晴 四十五至四十九度

西人馬凱言，浚浦局工程計畫，有浦閘一節，未必可行。按設閘之用意，

必為蓄清敵渾起見。彼以為不可行者，恐上海水源之供給與洩放，及本埠船隻之航行，均將大受影響也。且建閘工料，所費不貲，亦屬為難¹⁰⁸。然浚浦局西人之計畫，固明於水利學者，未可厚非也。

二月二十九日辛巳星期日晴 四十九至五十二度

常平，社倉之利民，在乎斂散以時，每年夏秋兩熟，准市價加錢收糶，遇歉歲減價出糶，愛人利物之君子，為此必規畫詳備，有慘怛惠濟之心，而無聚斂亟疾之意。潘叔度之立社倉於金華縣婺女鄉安期里之四十一都，朱子曾記其事¹⁰⁹。蓋行之有道者也。

二月三十日壬午星期一晴 五十一至五十四度

「浚浦局工程計畫」有調節揚子江下流之水量，及在杭州灣，奉賢建一開放並設閘之速流港口，以運河接通黃浦之議¹¹⁰。以上兩端，關係吾國主權，亟當注意。

【陽歷四月一日】三月初一日癸未星期二晴 五十五至五十七度

西人有提議改良世界歷法者，討論已歷半世紀。其中以一九一三年在聖彼德堡召集之萬國博學院大會為最著。各國提出之歷法制度甚多。約可分為兩大類。（甲）分一年為四季，其中一月為三十一日，其他兩月為三十日，同樣排列，外此按照閏年與否，增加二日或一日，名曰餘日。（乙）分一年為十三月。每月四星期，計二十八日，共為三百六十四日，外此按照閏年與否，增加二日或一日，名曰餘日，與上制同。默東天文台台長台朗特爾氏為贊成甲制派。蓋甲制派不主張分一年為十三月，變更習慣尚不致如乙制之甚。甲制歷法分一年為同樣之四季，每年時日永久相同，可以垂諸萬世而不變¹¹¹（見昨日『中華新報』載法國無線電【社】巴黎通訊）。

三月初二日甲申星期三晴 五十五度至六十度

歷法為萬事根本，授人時而定歲功胥賴乎此。吾中華自革新後，驟改西歷，但取與各國從同，而於國內是否適用，未經攷慮，不無遺憾。今歐洲既有改良歷法之提議，吾國亟宜自審國情，有所建白。宋沈括深明天文律歷，曾有廢閏改歷之說。其法以立春為歲首，每歲三百六十五日，遇閏加一日。今宜本其說制為歷法，以立春為孟春一日，驚蟄為仲春一日，清明

為季春一日。夏，秋，冬做此，每季六節，遇閏隨節加入每歲日期，與現行歷同，與今日西人主張之甲說亦同。惟四季分配之日數與閏日不同耳。然吾國以春，夏，秋，冬為四季，分二十四氣截然不紊，確有至理。既改之後，自孟春迄於季冬，皆不宐加月字。以某月某月，必陰歷乃適用之。陽歷亦稱某月某月，實屬不通。因函商蔚芝，擬聯名電請大總統，令觀象台審核呈覆電知駐法專使提出於國際大會。今日西人能讀中國古書者甚多，或可得其贊同也。

三月初三日乙酉星期四晴 五十七度至六十四度

西人議改良歷法，但取整齊畫一，而不免矯揉造作之弊。何若沈說按照節氣【分配】之出乎自然，因再函達蔚芝，酌之。

三月初四日丙戌星期五陰微晴 五十五度至五十七度

午後，詣先嚴慈墓次展拜。寄渭漁，蘇庭¹¹²⁾訊。

三月初五日丁亥星期六晴 五十七度至六十六度

龔澧丞來，談刻許而去。寄南京鄭笠山訊。

【清明】三月初六日戊子星期日晴 五十八度至六十八度

午刻，赴堡口。朝陽船已到。舟次晤地山自南通歸。暢談甚快。未正三刻，抵家。

三月初七日己丑星期一晴 六十度至七十一度

巳刻，地山來談，並遺余『通州興辦實業之歷史』兩冊¹¹³⁾，『南通地方自治十九年之成績』兩冊¹¹⁴⁾，『耆翁墾牧手牒』四冊¹¹⁵⁾。午後，詣壽安寺祖塋展拜。到者彙初¹¹⁶⁾，仲侯兩兄，壽民弟，仲侯之幼子，余及飴兒。旋至公園游覽一周。略坐片刻而返。

三月初八日庚寅星期二陰晚小雨 五十九至六十一度

巳刻，訪地山，立先，未值。稚菊來。午後，訪伯鈞商新南墾植公司入股事。張吉丞，施桂冬¹¹⁷⁾先後來。戌刻，至冠生弟處晚餐。在座有地山，賓谷，伯鈞，少谷，稚卿¹¹⁸⁾，棟臣，壽民弟。

三月初九日辛卯星期三雨陰半晴 六十至六十五度

賓谷，蘭墅來，言擬立地方公會事。婦，陸氏外甥女來，述家中瑣事甚悉，並邀余至廟鎮觀其新宅。戌刻，至立先處晚餐。同席為幼禾，地山，吟秋，伯鈞，耀香¹¹⁹⁾，悅甫¹²⁰⁾，月秋，閏秋，象先。

三月初十日壬辰星期四晴半陰 五十五六度

從修志局借『蘇州府志』水利門三卷。地山赴南通，來辭行。

三月十一日癸巳星期五晴半陰 五十五至五十七度

巳刻，出城。過沈家灣訪陳梅村，未值。午刻，抵廟鎮陸雲舫外甥婿家。未刻，閱日新布廠房屋。至寶興典略坐，旋穿公園而過觀國民模範小学校。戌刻，接家中報告飴兒患嘔吐。亟歸。十一時，抵家，詢悉竟日未食，胸悶作嘔。幸尚能安睡。

三月十二日甲午星期六小雨陰 五十五至六十度

飴兒之病由於食物太雜消化不及所致。用平胃散炒熨，漸得鬆動。申刻，大便。晚間，能食粥矣。

三月十三日乙未星期日霧晴 六十至六十九度

復金松岑¹²¹⁾信，並告以浚浦局擬在奉賢開闢港口，使黃浦接通杭州灣。彼以便利航路籌議及此，吾為疏洩太湖，則此項計畫亦大有研究之價值。蓋黃浦下游以一江而兩路分洩，未知是否合宜也。

三月十四日丙申星期一雨 五十九至六十四度

請第一醫院楊醫生，為飴兒第二次種牛痘。

三月十五日丁酉星期二晴 五十六七度

返堡西外廬。企柳¹²²⁾贈余竹竿十株。植於宅後竹園中，高度遠出旧竹之上。另有竹根，亦於隙處種之。

三月十六日戊戌星期三陰雨 五十七度

陳尚高自日本寄余花樹苗根，計櫻花五種廿五株，杜鵑十種廿株，山茶十

種十株。即令南榮分別植之。杜臣內姪¹²³ 携有蕪菜，鮮美異常，珍品也。

三月十七日己亥星期四晴半陰 五十八度

閱『明史』河渠志。宣德三年，臨海民言，胡嶠諸閘澇水灌田，近年閘壞而金鼇，大浦，湖淶，拳嶼諸河遂皆壅阻，乞為開築。帝曰，水利急務，使民自訴於朝，此守令不得人爾。命工部即飭郡縣秋收起工。仍詔天下凡水利當興者，有司即舉行，毋緩視¹²⁴。嗚呼，如明宣宗者，可謂賢君矣。

三月十八日庚子星期五晴半陰 五十八至六十度

明嘉靖二十四年，呂光洵按吳，奏蘇松水利五事。其第三條云，復板閘以防淤澱。河浦之水皆自平原流入江海，水慢潮急，以故沙隨浪湧，其勢易淤。昔人權其便宜，去江海十里許夾流為閘，隨潮啓閉，以禦淤沙。歲旱則長閉以蓄其流，歲澇則長啓以宣其溢，所謂置閘有三利也。近多堙塞，惟常熟福山閘尚存。故老以為河浦入海之地，果皆置閘，自可歷久不壅¹²⁵。按呂氏以行部而能留心水利。此條論蓄清敵渾專重置閘，大致由詢訪所得。故又引及故老之言。

三月十九日辛丑星期六晴 五十七至六十度

接鏡平¹²⁶ 訊。鈔寄財政部塩務署咨復國務院文，大致謂，崇銷淮塩核定有案，不能變更。所言絕無理由。余函托鏡平採詢公呈批詞，俟鈔到，再當拋理爭之。

三月二十日壬寅星期日陰 五十五至五十八度

友琳自城內來，留宿。張君勸積國際大同盟，略謂，吾中國勿以國際同盟之發生為可喜，而以國之不能自治為可悲。蓋此大同盟中明明規定曰，為團體員者，以能完全自治之國為限。吾能治兵乎吾能理財乎。凡此類者，皆不能自治之明証也。今雖濫廁同盟之列，然各國援委任統治之例，以施諸吾全國或一部之行政，均屬於不可知之數。吾故希望同胞亟函所以自治，勿以同盟之發生謂從此可以高枕無憂也¹²⁷。斯言吾甚佩之。

【穀雨】三月二十一日癸卯星期一雷雨 五十八至六十二度

友琳進城。接施少巖訊，寄海門改食淮塩成案底稿，係從呂四同仁泰塩公

司鈔得者。

三月二十二日甲辰星期二陰 五十五至五十八度
答沈思齊訊，寄奉賢南橋。

三月二十三日乙巳星期三晴 五十四至六十度
寄張退菴¹²⁸⁾訊，論大生紡織事業宜在崇明內沙建設第四分廠事。

三月二十四日丙午星期四晴 五十八至六十四度
詣油車橋，吊施君卓夫之喪，并為題主。

三月二十五日丁未星期五晴 六十二至六十七度
昨今兩日，南榮料理育蚕事。計下蟻得九錢四分零。

三月二十六日戊申星期六晴 六十五至七十一度
南榮第三次收蟻，量得二錢二分零。

三月二十七日己酉星期日晴半陰 六十二三度
耀香來，留宿。寄鄭笠山訊，託寄錢印霞¹²⁹⁾在省會提議浚浦局糜款侵權一案節略。

三月二十八日庚戌星期一陰小雨 六十二至六十四度
耀香回城。伯耕¹³⁰⁾函，告地方公會推余為正會長。余以不能担任，作書卻之。

三月二十九日辛亥星期二晴 六十五至七十度
范文正公拜參知政事，條陳江南旧有圩田，每一圩方数十里，如大城中有河渠，外有門閘，旱則開閘引江水之利，澇則閉閘拒江水之害。旱澇不及為農美利，又浙西地卑常苦水沴，雖有溝河可以通海，惟時開導則潮泥不得而湮之。雖有堤塘可以禦患，惟時修固則無摧壞。臣知蘇州，日詢訪高年則云，曩時兩浙未歸朝廷，蘇州有營田軍四部，共七八千人，專為田事導河築堤以減水患，於時民間錢五十文糶白米一石。自皇朝一統，江南不

稔則取之浙右，浙右不稔取之淮南。故慢於農政，不復修舉。江南圩田，浙右河塘大半隳廢，失東南之大利。今江浙之米石不下六七百文至一貫，比當時其貴十倍。臣請每歲秋赦下轉運司令轄下州軍，吏民各言農桑利害，或合開河渠，或築堤堰波塘之類，並具功績開奏。如此數年之間農利大興，下少飢餓，上無貴糶矣¹³¹。觀此知五季錢氏割挾江浙時，獨能修舉水利，置都水營田使督撩淺軍治河築堤。其時能重斂每畝至稅米三斗，而用之於農政者亦屬不貲，至婦趙宋版圖，而農政弛水患多，其必由於朝廷惜費，不復養營田軍也。

四月初一日壬子星期三陰 六十三至六十五度
蚕先取者頭眠。

【陽歷五月一日】四月初二日癸丑星期四雨陰晚晴 六十四五度

蚕續取者頭眠。接張退翁書，復紗廠事。略謂，海門三廠，現方悉力經營，若同時兼顧崇明，微特財力人力均有難於應給之勢，且通崇海陸地三廠聯絡差，足自囿吾圉。若更攬取臨江之內沙，則迹近龍斷，恐更招嫉。以工業實際言，似亦非必爭之局云云。

四月初三日甲寅星期五晴大風竟日 五十三至五十八度

閱『蘇州府志』。郝宣言，治水六得。一曰辨地形高下之殊，二曰求古人蓄洩之迹，三曰治田有先後之宜，四曰興役任貧富之便，五曰取浩博之大利，六曰舍姑息之小惠。又言，治田利害大概有七。一論古人治低田高田之法，二論後世廢高田低田之法者，三論自來議者只知決水不知治田，四論今乞以治田為先決水為後，五論乞循古人之遺迹治田者，六七未詳。熙寧五年，除郝宣司農寺丞提舉兩浙興修水利。宣至蘇興役，凡六郡三十四縣比戶調夫同日舉役，民以為擾，會呂惠卿被召，言其措置乖，方遂罷役¹³²。按宣任事勇而計慮疏。孔子謂，信而後勞其民，未信則以為厲己也¹³³，此之謂歟。況又為小人所傾，焉得不敗。

四月初四日乙卯星期六晴 五十五至六十三度

閱周樹槐「與永豐令論閉糶書」云，穀之在天下，猶血之在人身也。商者，氣之行血者也。氣壅血滯，於是有攔而為癭，歷而為癰。其不到者為

偏枯。以天下之穀，養天下之人，豐不見多，歉不見少，流而不憂其竭。故古之戒遏糴者，非獨救災分患，亦物之理然也¹³⁴。按周君不以閉糴為然，故言之如此，而亦確有至理。

四月初五日丙辰星期日晴 五十九至七十一度

彭泰來「答陳雪漁論西糴書」云，自古無無利而為之商。彼獲其利，而金粟之盈虛，藉以轉濟，則其利溥矣。論者惡商賈之因利，而不知商之利買賤賣貴而已。使西米果將不給買必貴同販者多，勢不能復貴賣。米非銅塩，何私之有以為私販宜絕。安所得官米而食之。古者五穀無稅，所以通有無，平貴賤，重民生也。至宋始收五穀，力勝稅錢，當時言者以為自古所無之弊法¹³⁵。按彭君亦不以閉糴為然。商販流通不宜禁止，通達治體之言也。

四月初六日丁巳星期一晴 六十五至七十四度

蚕先取者二眠。

【立夏】四月初七日戊午星期二陰半晴 六十九至七十三度

蚕統取者二眠。接賓谷訊，言，地方公會事，碍難重選，必欲余勉任會長一職。並述亞鄒，吟秋，勝存¹³⁶，稚卿諸君同一意見。遂答書允之。

四月初八日己未星期三晴 六十九至八十度

吾國專使在巴黎和會提議索還膠州灣事，為日本所持，英，法，美三国亦有愛莫能助之勢，吾之外交遂至失敗。北京得此消息，學界大憤，殿章宗祥，燬曹汝霖住宅，學生被逮者二十餘人，都市戒嚴。滬上響應，將召集國民大會。以此見人心未死。鬱極必發。不識政府能善為應付否。

四月初九日庚申星期四陰 七十三至八十度

余著「說米」一篇，大致以米禁病農，擬倣古人常平社倉之意，變通而補充之，合蘇松常太杭嘉湖七郡同志，籌設憫農會及因利公司。凡事由憫農會議決之，因利公司執行之，秋成取糴，照市加價，約以二百萬石為率，酌提一成，照本平糴，餘則陸續銷售，一歲統計，贏利若干，藉充公益夫。而後產額可以調查，銷數可以稽核，禁令可弛，恐慌可平。此後農以

獲利田本。蓋勤農產益，正是真國家無盡之藏也¹³⁷⁾。

四月初十日辛酉星期五晴晚雷雨 七十三至八十度

接外沙商會函，稱，拋呂四場同仁泰塩公司復函內稱，食塩八百斤為一引，每担繳稅壹元，海境定案認銷壹千引，實在能銷貳千餘引云。吾邑塩務，近有稽核所洋員南來調查，見前兩日報紙¹³⁸⁾。

農隱廬日記 己未四月至八月¹³⁹⁾

【己未】四月十一日壬戌星期六陰晴雨 七十三至七十七度

再寄張退庵訊，言大生宜在崇明內沙設廠事。略謂，兩廠有餘款可撥最好，否則訂章另集。以大生之信用，應者必踴躍。購機建廠，酌量遲速以赴之，可也。近來紗業咸以不能得壽星牌為憾，然三廠開機後，壽星紗綫以行銷內沙為正路。故內沙設廠，不啻為三廠增一道，樊籬亦以見通，崇海商業，實能聯絡一氣。豈有龍斷之嫌。內沙與滬上往來，便於久隆。大生不自營，必有他人營之者。大生不與人爭，其如他人來爭何。蚤先取者三眠。

四月十二日癸亥星期日陰小雨 六十四五度

蚤統取者三眠。胡子鋒自福州旋里來談，即去。

四月十三日甲子星期一陰晨微雨 六十三至六十五度

李象鵬「平餉禁囤議」云，今之議救慌者，有二說。曰平穀餉，曰禁囤積。余以為是二者皆非篤論也。穀之貴賤視乎時。諺所云天作餉也。禁囤之害，又與平餉相表裏。凡物多則賤，少則貴。增餉於空乏之時，以為招徠計，則少者貴，多者賤，不求其平，乃平餉之要務。囤積之戶，豈不利災。然善餉不沽，何事於積。幾曾見穀貴之年，積穀者猶陳陳相因也。是又以不禁囤積為平餉之法¹⁴⁰⁾。所言皆真切有理，余甚韙之。

四月十四日乙丑星期二小雨陰晚晴 六十三度至六十五度

蔚芝寄浙西杭，嘉，湖三屬請減田賦呈文一通，係嘉興金甸丞同年¹⁴¹⁾所

擬，屬余合江浙彙撰一稿。此事關乎蘇，松，常，太者，尚待調查，未便率爾為之也。施禮齋¹⁴²⁾來，勸募京師孔教堂建築費。留宿。

四月十五日丙寅星期三陰微雨 六十三四度

禮齋赴八灘。『江蘇水利雜誌』紀鮑隱「致鶴望書，論江流」，云，神禹治水之後，以訖金代河未南徙之前三千年，江，漢兩流皆清，挾沙甚微。自黃河南徙以後，河沙一小部分奪運入江，江於是始濁。明時漢水變遷，衝動沙域，江水益濁。清乾隆中藕池口決，洞庭改變，江於是大濁。八百年以來之江水，非復晉唐之江水矣云云¹⁴³⁾。余按，江水本為清流之說不確。吾邑積沙成壤，在唐時已發見於江中。又范仲淹知蘇州時，為景祐元年，上書宰相具言水利，略云，新導之河，必設諸閘，常時扃之，以禦來潮，沙不能塞也。每春理其閘外，工減數倍矣¹⁴⁴⁾。是皆江水挾沙之明証。其時黃河固猶未南徙也。

四月十六日丁卯星期四晴 六十至六十四度

蚤先取者大眠。蓀庵來，談數刻而去。

四月十七日戊辰星期五晴半陰 六十至六十六度

復吳門金松岑訊，告以端節前後，當赴蘇晤商水利聯合會進行事宜。

四月十八日己巳星期六陰小雨 六十五六度

蚤統取者昨今兩日先後大眠。約得十之八強，尚有以氣候不熱未齊者。復寧垣鄭笠山訊。

四月十九日庚午星期日陰微雨 六十六至六十八度

馮敬亭先生「繪地圖議」云，圖之為用甚大，均賦稅，稽旱潦，興水利，改河道，分為四端¹⁴⁵⁾。語至詳覈。

四月二十日辛未星期一陰 六十八至七十三度

復沈思齊訊寄南京，言江浙水利聯合會，以後開會就蘇，杭兩地間開，余極表同情。應即照此通告同人。

四月二十一日壬申星期二半晴小雨 七十至七十五度

馮敬亭先生「江蘇減賦記」叙同治二年五月奏請以前籌議情形甚詳。蓋奏稿出先生之手。當時吳君雲言，宜請照常州起科。先生以為驟請減三分之二，終嫌河漢，不敢下筆。然猶詳言蘇，常犬牙相錯，天時，地利，人事，無一不同，而賦額二倍，為不平不均之尤。越日又以篇幅過長刪此一段，後先生深悔不從吳君之言，引為憾事¹⁴⁶。

四月二十二日癸酉星期三陰雨 六十三至六十六度

寄蘇州潘濟丈訊，言浙紳擬聯絡蘇紳請求減賦事。以時局而論，政府濫於軍用，百計搜刮，尚虞不給，欲其繳發。体恤民艱之宏願，殆非旦夕可期。然政号共和，動稱民意，則東南人民數百年之積困，豈遂緘口不言，忍而與之終古。故為地方計，不必問政府之能允與否，當先問人民之應爭與否。此請減之舉，固有不忍已者也。

【小滿】四月二十三日甲戌星期四晴 六十二至六十八度

搏九來，言沙氏購回小安沙租地事，業與沈君幼瑜商議妥洽，先訂草約。共銀四千九百元，已收壹千元。

四月二十四日乙亥星期五陰半晴 六十五至六十九度

周夢顏「蘇松財賦攷」采入『四庫全書』有刊本¹⁴⁷。當從藏書家訪之。

四月二十五日丙子星期六晴 六十五至七十三度

地山函，告大生分廠股東會議決添五千捻。至崇明內沙另設分廠一層，已否認云。蚕上山者十之二。

四月二十六日丁丑星期日晴 七十至七十五度

蚕上山者十之三。以搭山木架簾薄之類未能齊備，臨時不免倉皇，且多占地位，甚非計也。

四月二十七日戊寅星期一晴 七十至七十六度

蚕統上山者十之三。報載張耆老致總統電，云，青島問題，舉國騰憤。報章披露，事實瞭然。罪之所構，在軍人議員。而獄之所屏，在政府。政府

即甘自殺，人民寧不求生。儻竟認日人占領青島，外則成敵陰謀，留四面均勢之蒂，內則復旧專制，貽百年內訌之憂。國使退出和會，固不能議其非，國人同仇抗爭，亦豈忍責其過。政府雖徇少數人之作用而跪於前，我公當亦念無數人之難犯，而誌於後。蓋昔之代表少數人而致誤，不得已也。一時也。今以代表無數人而補過，亦不得已也。又一時也。乞公迅電巴黎專使，嚴令決勿簽字。敵無論若何狡，若何橫，奪我土地可也，戮辱我人民可也。懼其狡，懼其橫，一二人畫諾猶不可也。全國人拱手而默許之，尤萬萬不可也。此舉，國人之真意也。願公審之又審，慎之又慎。再教育傳總長¹⁴⁸已去職，報載將有安福派繼長教育之說。安福何派。派有何人。江海野人，無暇聞此。惟聞前此出錢收買議員，即此派人。則掃蕩國人之廉恥者，此派人也。扇播政爭之酷毒者，亦此派人也。若以此派人主持教育，豈將夷全國於牛馬襟裾之列乎。抑將薰學子以犬豕盲躁之臊也。全國學生正当盛氣之時，此令若頒，一波又起，未必諒政府之應酬黨派為不得已也。公之明，必見及之。以上所貢，雖為成事之說，似亦最後之救。萬乞鑑察。國家幸甚，教育幸甚¹⁴⁹。語極切至，不識東海¹⁵⁰果能容納否。

四月二十八日己卯星期二晴 七十一至七十七度

張齋老致省長電云，報載省議會二讀八年度預算案，減削教育實業費，增加議員歲費七萬五千餘元，為之駭嘆。省議會何等地位。今之議員何種來歷。議員不自省，非議員【則】孰不知之者。一省要政何事。今時何時。所議何議。即不望其利國福民，獨奈何敢於嗜利無恥，悍然議削教育實業費，自增歲費。唱者即為病狂，全会豈皆頑鈍。此風一開，他省效之，遺臭四方，蘇為之首。醜如之何。如果咨到省署，乞勿公布。是則真正蘇民之意也。嘗為前無量之蘇民惜，為後無量蘇民計，故不恤犯群小之愠我。望公為君子之愛人，幸加軫念，無任慨痛¹⁵¹。按左對省会增費電甚多，無有為此痛快者。

四月二十九日庚辰星期三黎明雷雨晴 七十三至七十九度
昨今兩日蚤全体上山。

五月初一日辛巳星期四晴 七十五至八十一度

寄浙江省長齊照巖同年¹⁵²⁾訊，略謂，太湖水利經費，徵諸輿論，宜由國庫籌撥。容俟開會公議後，呈請核辦云云。

五月初二日壬午星期五晴 七十五至七十八度

開始摘繭。午後，赴堡口候船。晤陶甫，搏九，談良久。酉刻抵家，即走訪張鼎長，悉鸚鵡港塩巡滋事案。省長電復，已會同督軍，轉電兩浙運使查辦。戌刻，赴醫院董事會議，即留晚餐。返家，已亥正。

五月初三日癸未星期六陰 七十三至七十六度

晨訪伯耕，告以地方公會會章有應行修改處。巳刻，上船。未刻，返堡西廬。

【陽歷六月一日】五月初四日甲申星期日陰小雨 七十五六度

開始繅絲。仍雇住居小漾之嘉興婦人，第一車得絲二十三兩。復金松岑訊，約初八九會晤。

五月初五日乙酉星期一陰 七十三至八十度

午初刻，乘轎進城。途中，泥濘難行，抵家已五時矣。

五月初六日丙戌星期二陰 七十至七十三度

午後，在萬安倉開公民大會。到者達五百餘人。張鼎長亦到場監察。議決以改食淮塩為善後之法。倣照海門成例，自集公司，認稅承銷淮塩。請鼎長電呈督軍，省長，電咨塩務署核准照辦。余亦另擬一電，大致相同。

五月初七日丁亥星期三陰半晴 六十九至八十度

巳初，訪張鼎長，接洽發電事。旋上船。午膳後，晤場知事楊君，談論塩務，對於稽核所人員之荒謬，緝私營巡丁之騷擾，慨乎言之，同辦一事而彼此齟齬。楊君亦自謂紛亂不堪矣。四時，抵滬，寓振華旅館。施友先¹⁵³⁾來，略談片刻。贈余粵東土宜四種。

五月初八日戊子星期四晴 七十五至八十度

乘早車赴蘇，寓惠中旅館。午刻，至外舅處，留膳。旋訪金松岑，潘濟丈。申刻，返旅館。聞上海罷市消息。

五月初九日己丑星期五晴 七十五至八十度

巳刻，詣外舅處，旋詣穎芝¹⁵⁴，未值。午刻，赴松岑之約，同坐有潘濟丈，沈期仲，錢強齋¹⁵⁵，費仲深¹⁵⁶諸君。申刻，再至外舅處，辭別。即上火車返滬。

【芒種】五月初十日庚寅星期六晴 七十七至八十三度

巳刻，冠生弟與彭女士結婚。余為主婚。午刻，設酒筵兩席款客。申刻，訪舜卿及松江運副孫履安談，吾邑塩務甚悉。戌刻，設酒筵三席款客。

五月十一日辛卯星期日晴 八十三四度

巳刻，訪劉柏生¹⁵⁷，旋返旅館。友先來，留午膳。未刻，舜卿來。同至徐家匯訪蔚芝，未值。至附屬小學，晤沈叔遠¹⁵⁸。悉蔚芝在蘇州醫治目疾云。戌刻，柏生約在消閑別墅晚餐。舜卿亦在座。

五月十二日壬辰星期一晴半陰 八十三至八十七度

滬上罷市，已五日，尚無轉圜之望。昨日，蘇，常亦響應，是金融停滯。雖欲不罷而不得。今日之局，當以滬市為轉移。設再遷延數日，波及工廠，則貧民，失業者多，危孰甚焉。巳刻，上朝陽船。未正，返堡西。

五月十三日癸巳星期二晴 八十三至九十度

蔚芝寄余金甸丞同年「嘉興求減浮糧書」，首列前人成說，徵引綦詳。如黃季瀚浮糧議云，蘇，松浮糧中外言事，屢請酌減。獨嘉，湖浮糧，從未有流賈生之涕者。夫一方之利弊必本，土有芻蕘，而後可以備仁人之採摺。斯言信然。甸丞論同治初年浙省減賦事，頗不滿於左文襄¹⁵⁹，以為不如李文忠¹⁶⁰之賢。不知李文忠奏蘇，松，太浮糧，係採馮敬亭之議。設嘉興亦有敬亭其人者，吾知湘陰決不遜於合肥也。

五月十四日甲午星期三陰小雨 八十八十一度

鄂爾泰浮糧詩云，不見八閩地，嶺海環深阻，蘇屬一梟額，貢金已相伍，加以漕糧艘，十又增其五，不見滇與黔，綿延互疆宇，眷茲松陵區，蕞爾何足數，豈知一邑租，兩省尚多許¹⁶¹。見國朝詩錄，為蘇，松減賦作也。甸丞謂，正與嘉興情事相同。

五月十五日乙未星期四陰微晴 七十九至八十八度

昨日崇滬輪船均停駛，朝陽今日來崇。聞曹如霖，章宗祥，陸宗輿三人之罷免已証實，上海一律開市。計此七日中商業之損失，不為鮮矣。

五月十六日丙申星期五陰 七十三至七十八度

縑絲已畢。共得絲一百七十九兩。

五月十七日丁酉星期六陰小雨 七十三四度

報載張季直致徐，段電文一通。語語切直而沈痛，非積數十年讀書養氣之功，不能為此。錄之如左。自巴黎和會以山東權利歸諸日本，全國憤恨，愈演愈激，此為三年以來親日政策之結晶。親日政策者大總統建議，而芝泉¹⁶²贊成之，曹，章，陸奉行之。其始因歐戰方殷不暇東顧，為一時苟安計。政府苦心，國民未嘗不諒。漸至利用借款以資戰，利用軍事協定以樹援，則是親日便小己之主張，快一朝之泄忿，不純為國家安全計矣。最可痛者，於德軍垂敗之時，寺內內閣已倒之際，更在東京訂立濟順，高徐兩路借款之約，而腹以膠濟合辦之附件。最可駭者，路約未訂之先，我公使先以導意之公文，致彼同意之答復。引繩自縛，足扼我國巴黎專使之吭。稽其時日，則大總統業被拳，芝泉尚柄政。捫曹通電稱，此路約因總統就任無款，不得已而為之。凡所見聞，事實明白，訂立此路約之責任，固大總統，芝泉負之矣。政府亦知膠濟，濟順兩線之重要乎。該路為自海口至腹地之東西幹線，以軍事言，以政治言，均極重要無論矣。山西煤田鉅量之富，有名於世界。歐戰發生，各國皆苦煤乏。山西之煤，足供他日世界所需。其精華萃於潞沢，將來必由順濟以達青島而輸送海外。故今日握膠濟，濟順兩路之實權者，他日將有操縱山西煤鉅之權。換言之，即東方實業之主人翁也。今日世界列強，經濟競爭如是之烈，國民即默然無言，彼主張門戶開放，機會均等之列強，安能俯首屏息，任日本一國占扼

吾國精華以稱雄世界乎。世界無第二大戰爭則已，有之，則此路約，其導火線也。繫鈴解鈴，今尚可為。兩公若不於此根本覺悟，籌解決方法，雖或補苴隙漏，止沸一時，而亂源未塞，遲早必發。如世界何。如中國何。如兩公生平及後世何。即日人之為是謀者，置國火上，終不為福，亦下策也。況在中國。抑謦更有不能已於言者。方事之起，政府觀察以為黨派作用，由一二人所指使，於是時而威嚇，時而敷衍。豈知國人常識，已較勝於七八年前。今輿情憤激，全在外交失敗。若外交問題不從根本解決，言乎威嚇，適足損威。言乎敷衍，適足喪信。憤何能平。平何能久。今日試召罷學，罷市，罷工之人，詢以是否受人運動，雖至懦者亦將忿怒。引繩而絕之，絕必有其處，其故可思矣。非黨派勢利之所能到，亦非黨派思慮之所能及，何黨派之云。且政府恃以維持現狀者，軍警耳。軍警寧非國民，豈無耳目。豈無心肝。辛亥之事未久，兩公皆所親歷者。彼時謦亦一再痛陳，速了川事。政府不納，卒不救。今內非一川之比，外非一國所關，抑且略聞外人之論矣。為世界計，為日本國民計，尚不宜種伏禍根，置於危地。況於政府有榱崩棟折之憂，於兩公有送袍推襟之雅，其敢不罄所識慮，盡言於善人。千萬諒察謦憂¹⁶³。

五月十八日戊戌星期日陰小雨 七十二三度

陸軍第三師師長吳佩孚，駐師衡州，軍紀嚴整，饒有儒將風度。湘人多稱道之。近以外交失敗北京逮捕宣講學生，上大總統一電。語極中肯，能見其大。亟錄存之。近日迭拋滬電，北京學生因開會宣講，被捕者數百餘人。滬商全體罷市，並沿江各埠亦有繼續罷市罷工之舉動等語，不勝駭然。竊惟天視自我民視，天聽自我民聽，民心即天心也。士為四民之首，士氣即民氣也。此次外交失敗，學生開會，力爭全國一致不約，而同民心，民氣，概可想見。我政府當軸諸公，對於我大總統五月廿五日命令，不注重割切曉諭，而趨重逮捕，似覺操之過急。對此直言之學子，未免輕重倒顛措施失當，殊非我大總統維持時局之本心也。且防民之口，甚於防川，川壅必潰，其傷實多徵諸歷史，不寒而慄。即如辛亥爭路風潮，尤可為最近之殷鑑。夫天下興亡，匹夫有責。況學生乎。古之以學生言時事者，漢則有劉陶，宋則有陳東，載在史冊，後世傳為美談。當此外交失敗之秋，顧忌者懼於威而不敢言，偏私者阿其好而不肯言。銅駝荊棘，坐視淪胥，大好河山，任人宰割。稍有人心，誰無義憤。彼莘莘學子，激於愛

國熱忱而奔走呼号，前仆後繼，以筵擊鐘，以卵投石。既非為權利熱中，又非為結党沽譽。其心可憫，其志可嘉，其情更有可原。縱使語言過激，亦須遵照我大總統剴切曉諭四字，竭力維持。如必以直言者為有罪，講演者被逮捕，則是揚湯止沸，勢必全國騷。揆之古人，諫鼓之談，謗格之立，芻蕘之詢，鄉校之議，不無刺謬。且日俄戰後，日人疑 氏外交失敗，亦曾有圍焚屋宇之舉動。日政府乃特開國民大會，宣示交涉之理由，群情帖然，並未聞有激烈逮捕情事。我國此次交涉始末，既無不可告人之隱，即宜倣照日本辦法，宣示全國，以釋群疑。學生又何苦越職干政，自取咎戾。如必謂民氣可抑，衆口可緘，竊恐衆怒難犯專欲難成大獄之興，定招大亂。其禍當不止於罷學罷市已也。師長等素性戇直，罔知忌諱，憂之深有不覺言之切者，仰懇我大總統，以國本為念，以民心為懷，一面釋放學生以培養士氣，一面促開國民大會，宣示外交得失緣由，共維時艱，俾全國一致力爭取回青島，以平民氣而救危亡。時機危迫，一髮千鈞。臨電，不勝惶悚待命之至¹⁶⁴⁾。

五月十九日己亥星期一陰半晴 七十三至七十七度

聞外沙永昌鎮又有塩巡鎗斃鄉民之事。橋鎮發見匿名揭帖，訂期打毀塩棧，顯係奸徒故施毒計，設穿陷人。因再電請督軍，省長，派委徹查，按法辦理，並主持改食淮塩，以弭無窮之後患。

五月二十日庚子星期二晴 七十三至七十八度

近日堡市一帶亦有謠言。鄉民對於浙塩惡感甚深，設有風波，必致地方糜爛。南九來，言擬聯絡學界，四出演說，開導鄉民，勿得暴動。余甚韙之，因請萃拔先生與南榮，同赴北堡演說。

五月二十一日辛丑星期三晴半陰微雨 七十三至七十七度

南榮赴北馬橋演說。歸來告余，鄉民聽者都能了解，欣然而散。以此知啓發民智，端賴普及教育，不可緩也。

五月二十二日壬寅星期四陰大雨旋晴 七十五至七十九度

賓谷豐次來訊，約余進城商酌塩事。因於午膳後，赴堡口。朝陽船已先一時到。在此等候。酉初，抵家。至壽民弟處，晚膳。

五月二十三日癸巳【卯】星期五陰 七十六至八十度

巳刻，立先，吟秋，幼禾來談。午刻，張鼎長來。未刻，警備隊長韓雨人，二等警佐盛錦泉¹⁶⁵來。酉刻，答訪張鼎長。訪立先，未值。訪賓谷於第一高小學校。戌刻，閏秋，伯厚來，所談無非塩案。張鼎長，人太長厚，幕友無得力者，債事可慮。

五月二十四日甲午【辰】星期六陰小雨 七十七至八十度

巳刻，鷺翹，立先來談。午初，訪閏秋。旋至萬安倉。邀請張鼎長暨警佐陳讓之¹⁶⁶，盛錦泉，警備隊長韓雨人午餐。陪坐者為張鷺翹，龔少莘，施閏秋，立先，曹吟秋，陸賓谷，張幼禾，嚴亞鄒，張蔭公¹⁶⁷，蘇稚卿，馮耀香，壽民，冠生兩弟。讌罷，申刻，偕閏秋，立先，幼禾，亞鄒，稚卿同往鼎公署，閱看塩【務】卷宗，電稿，詳稿，顯有舞文弄法之處。訊之，皆【出】於第一科主任。佐治非其人，竊為張君危之。寄伯納同年快郵訊。

【夏至】五月二十五日乙未【巳】星期日雨 七十六至七十九度

寄渭漁快郵訊。寄運副孫履安訊。未刻，少莘來談。酉刻，赴張鼎長約晚餐。同席有鷺翹，閏秋，立先，吟秋，壽民弟。戌正三刻，散。

五月二十六日丙申【午】星期一雨 七十三至七十五度

約吳漢莊，成叔齋，李魁龍午餐。陪坐者為楊輯五，袁一飛，陸仲虞，馮東甫，顧竹銘，達渠弟。申刻，訪少莘，桴園，未值。酉刻，赴閏秋，立先約晚餐。客有張鼎長，陳，盛兩警佐，韓隊長，桴園，少莘。

五月二十七日丁未星期二雨 七十一至七十三度

午刻，返堡西。內子寒熱以外，又加氣痛，忽在胸部，忽在小腹，上下無定。用熱物如炒香附蔥姜，食塩，麩皮之類，熨之。間或停止，踰時又發。勺水不入口，困憊益甚。殊為擔憂。為塩案黑幕顛倒是非，再督督軍，省長電一件。

五月二十八日戊申星期三兩陰 七十三至七十七度

內子氣痛，大致為症瘕之瘕。亦不外乎肝鬱。磨茄楠香二，三分，服之。

至晚，痛定。

五月二十九日己酉星期四晴 七十七至八十二度

張齋老「敬告全國學生書」略謂，人托於國，國皆當愛，諸生愛國之意是，而法則非。非即罷課。走病其法非是惡能不憐其意之未盡非也。然為學生深長慮者，一慮學生憤盈之氣，因得請而漸長。一慮他界鷹眼不化，將被其影響擬似之累。二者有一，皆非學生福。因二慮而得一策。欲以此策，策學生負責任，知實踐務合群，增閱歷，練能力。夫世界今日之競爭，農工商業之競爭也。農工商業之競爭，學問之競爭也。實踐，責任，合群，閱歷能力之競爭也。皆我學生應知應行之事也。信能如此，要可雪空言無實之恥，是在學生。吾跣踵拭目以覩之矣¹⁶⁸。語正熟切。

五月三十日庚戌星期五晴陰小雨 七十七至八十一度

金君松岑寄余，振興江南北水利籌款案印件，係宗君嘉祿提議者。余閱之，有應商酌處，爰錄質疑三條，寄笠山以便臨時會議公決。

六月初一日辛亥星期六陰雨 七十五至七十七度

接地山訊，言張鏡湖¹⁶⁹鎮守使頗關切吾邑塩案，亦以改食淮塩為根本解決之法，已於廿五日親往寧垣為軍民兩長言之。

六月初二日壬子星期日陰小雨 七十三至七十五度

寄幼禾訊，告以塩案應公推在京同鄉數人為地方代表，直接向塩務當局磋商。

六月初三日癸丑星期一雨 七十四度

接笠山訊，言目下抵制外貨正可利用時機發起興業儲金，從事於銀行，棉，鐵三種實業，信能行之，則社會真有進步矣。

【陽歷七月一日】六月初四日甲寅星期二陰 七十二三度

江浙水利聯合會今日在蘇州開臨時會。余以內子病不能出門，先已函請芸生，思齊代主會務。

六月初五日乙卯星期三雨陰 七十三至七十五度

吳氏外姑旋蘇，以見內子病久，焦愁萬狀，非老年所宜。故余亦不敢留之。

六月初六日丙辰星期四晴陰小雨 七十五至七十八度

內子病狀益危，湯水不能下咽，而時時反胃作嘔。是肝鬱成膈症之象。醫書謂氣膈難治，真令人無所措矣。

六月初七日丁巳星期五陰 七十五至八十度

通海鎮守使署副官長趙君子超來，係奉張鎮守使派委，訪查永昌鎮塩巡滋事一案。談片刻，亟欲過沙，因雇車送往相見港，宿於舟次，候潮渡海。

六月初八日戊午星期六陰半晴 七十九至八十六度

大女自南翔來，省內子病。

六月初九日己未星期日陰半晴 七十九至八十四度

笠山，遜菴蘇州來訊，言發起國民興業儲金事，並附笠山商榷書。

六月初十日庚申星期一雷雨午後陰

內子病狀作嘔之外，三日來又加呃逆，顯係不治之象，屢屢屬余勿走開。午後四時尚問余幾下鐘，甫逾一刻，忽轉身仰臥，神氣陡變，倏然而逝。痛哉，十載因緣，絕於俄頃，尚何言哉。並電大兒毓斌，告以能歸則歸，否則請假在京成服。

【小暑】六月十一日辛酉星期二陰

省委林黻楨來訪，查塩巡滋事一案，詢其籍貫，知為侯官文忠公¹⁷⁰之曾孫。內子衣衾棺木，旬日以來均已預備，遂於今日亥刻入殮。

六月十二日壬戌星期三雨 七十八度

大兒毓斌電稟今日由京起程。余痛吳夫人，得一輓聯，云，事我有至情，蘇侶雙樓，直不殊元配也。哭君還自念，龍鐘老態，尚能活幾年耶。

六月十三日癸亥星期四雨 七十五度

再輓吳夫人一聯，云，廬墓得清間，共商種竹栽花，垂老幸償偕隱願。學農須經驗，再說飼蚕煮繭，督工那有內心人。幼禾，仲虞，壽民，冠生兩弟，前昨兩日先後來，今日去。

六月十四日甲子星期五雨 七十二三度

蘇庭寄來『談塩叢報論說彙編』兩冊¹⁷¹⁾。開卷即知為塩商反對改革而作。凡張耆老之塩政計畫，無不肆意攻擊，殊可恠也。耀香夫婦今日進城。

六月十五日乙丑星期六晴 七十三至八十一度

蔚芝寄來蔣君省龔¹⁷²⁾所擬蘇屬減賦呈稿一通，並酌推請願代表名單，王生永禮報告浙代表已定情形一函。余即轉寄松岑，請其逕商浙屬同人辦理。

六月十六日丙寅星期日晴 七十九至八十五度

三輓吳夫人一聯，云，平生愛月亦愛花，氣稟至清，信是君身有仙骨。臨死拒湯又拒藥，証成不治，話來病狀最傷神。吳外舅來信，慈懷傷痛情見乎詞，不忍卒讀。

六月十七日丁卯星期一晴半陰 八十至八十五度

渭漁寄來同鄉京官為塩案公呈一件，並云，現已行查到省，俟督軍省長復到，即核辦。昨第三聯又加注，云，延陵夫人愛月愛花，具有特性。十載塵緣，一朝解脫，對此月光花影能無悽然。夫人抱病久，岐黃家早謂非藥物所能療治。惟平日習於儉勤，不厭操作，人之見之者，以為無大病也。臥床僅十數日，臨終猶神志清明。統撰此聯，以誌哀悼，亦紀實也。寄吳外舅訊。

六月十八日戊辰星期二雨陰半晴 八十至八十四度

蘇庭，少農¹⁷³⁾函，告大媳十三日戌刻分娩，得一男孫。因命乳名同慶，以與先君同生日也。譜名榮章¹⁷⁴⁾。八字缺木與火，故取榮字以補之。

六月十九日己巳星期三晴 八十至八十四度

遜菴來，交到江浙水利聯合會函記，會長函章各一。留午膳而去。

【初伏】六月二十日庚午星期四晴 八十一至八十五度

復涓漁訊，告以鹽署主張淮浙並銷，顯係浙商所運動，未可輕於承諾，宜集同人，細加研究。

六月二十一日辛未星期五晴 八十至八十五度

寄笠山信。

六月二十二日壬申星期六晴半陰 八十至八十五度

復松岑訊。請求減賦，不如截留漕折。為了當信。然代表係純粹義務，不便強人所難。除南中推舉數人外，宜求諸旅京同鄉能與政府接近者，尤好。

六月二十三日癸酉星期日陰微晴 八十至八十五度

施調元來，接管此間司帳一職，以丹臣已辭退也。

六月二十四日甲戌星期一陰晚雷雨 八十一至八十六度

內姪杜臣自蘇來。穎芝寄『儀宋堂詩集』第二卷新刻樣本¹⁷⁵⁾。

六月二十四【五】日甲戌【乙亥】星期二晴半陰 七十七至八十三度

請伯鈞來填寫吳夫人神位及明旌。備筵兩席，來客不多。

六月二十六日丙子星期三陰晚小雨 七十九至八十四度

聞上海疫診盛行，大致以陰雨過多濕熱蘊積而成。講求衛生，不宜貪食瓜果，此說最當注意。

【大暑】六月二十七日丁丑星期四晴 八十至八十五度

參議院議員嘉定吳挹清先生¹⁷⁶⁾，代吾邑請求改食淮鹽，在參議院提出議案，以尚未列入議事日程，又以個人名義熟切函商鹽務署長。厚誼可感。須由金任君寄來往復函稿各一件。

六月二十八日戊寅星期五晴陣雨数次 八十一至八十六度
塩務署復吳挹翁函，偏徇浙商一面之詞，不顧事實，語多謬妄，以一國塩政最高機關，而竟與受餒養於塩商者同一口吻，可笑亦可恨。爰條列函語，作糾謬一篇。

六月二十九日己卯星期六晴 八十至八十七度
吳夫人三七設奠，堡市一帶親友來吊者九十餘人。寄吳挹翁信。

【中伏】七月初一日庚辰星期日晴 八十一至八十七度
檢理物件，預備進城。以吳夫人五七設奠，在城宅領帖也。

七月初二日辛巳星期一晴 八十一至九十度
午後，赴堡口。候良久，三時，上船。六時，抵家。

七月初三日壬午星期二晴 八十至八十五度
檢理書籍，拾只送堡西。傍晚，接遜庵信，水利聯合會呈文，請用圖記。余本擬携圖記進城，臨行竟忘卻。衰年龍鐘之象，真不堪任事矣。

七月初四日癸未星期三晴 七十八至八十一度
專人赴堡西，取水利聯合會圖記來。將呈文六件鈐印記送蓀菴發遞。

七月初五日甲申星期四陰半晴 七十九至八十四度
統理書籍拾只送堡西。檢出崑山周夢顏『蘇松財賦攷』一冊，係蓀菴任鼎知事時所排印¹⁷⁷⁾。余四月間欲從藏書家訪之，何其善忘也。

【陽歷八月一日】七月初六日乙酉星期五陰大風 八十二三度
聞幼禾患病，往省之。適地山甫從南通歸，悉病係時疫。手足冰冷，其勢頗危。

七月初七日丙戌星期六陰大風下午雨 八十一二度
聞幼禾昨夜已故。亟往晤地山，深為痛惜。

七月初八日丁亥星期日陰晴小雨 八十二至八十五度

吳夫人画像由朝陽船到埠，預備明早迎送入城。內姪延費，內姪女梅芳小姐及內姪媳均從蘇州來。

七月初九日戊子星期一晴 八十三至八十七度

辰刻，迎吳夫人画像到家，一切布置粗得就緒。統寄堡西書箱十八只。

七月初十日己丑星期二晴 八十三至八十七度

黃時敏由安東寄余『鴨綠江采木公司創立第十週年營業彙編』一冊¹⁷⁸⁾。

七月十一日庚寅星期三晴 八十二至八十五度

統寄堡西書箱十二只。午刻，請客兩席，均用素菜，取其潔淨也。

七月十二日辛卯星期四晴夜小雨 七十七至八十一度

巳刻，醉石來，談兩刻。傍晚，答訪之。為請願截漕事，寄松岑，笠山，蓀庵各一書。

【立秋】七月十三日壬辰星期五陰夜雨 七十九至八十一度

為吳夫人五七，開吊第一日。挽聯以周象峩，施桂冬二聯為最佳。

七月十四日癸巳星期六晴半陰 八十至八十三度

接金甸丞同年訊，言減賦事將单独進京商量云。今歲農田受水患，賑恤不聞而催科甚切。宜其汲汲為減賦之請也。

七月十五日甲午星期日晴半陰 八十至八十三度

徐止畝寄輓吳夫人聯甚佳。余擬挽幼禾一聯，云，救國仗英才，最可痛平生肝胆照人，年胡不永。託孤有仲叔，但得承先世詩書餘澤，後必能昌。

七月十六日乙未星期一晴 八十至八十四度

請客兩席，仍備素菜。到者為張醉石，嚴珪鄒，郁岬崙¹⁷⁹⁾，黃涵秋，陸頌虞，張棟臣諸君。

七月十七日丙申星期二晴 八十一至八十五度
送吳夫人画像返堡西。余本擬同去，以飴兒患病不果。大兒毓斌起程進京。大女回南翔。

七月十八日丁酉星期三晴 八十三至八十六度
飴兒自十六起發熱便閉，延醫院康君診視四次，服藥後大便通利，熱亦退減，能進食矣。

七月十九日戊戌星期四晴 八十三至八十七度
龔君靜泉染疫歿于萬安倉。輓以一聯，云，染疫喪幹才，是社会與君家同遭不幸。興農遺碩画，願後人補先生未竟之功。

七月二十日己亥星期五晴午後陣雨 八十三至八十八度
寄金松岑訊。寄宋蓀庵訊。

【末伏】七月二十一日庚子星期六晴 七十九至八十五度
吳門顧蔭孫先生訃至。挽以聯，云，悲晚近世風衰，能力矯頹靡之俗。入吳中耆旧錄，有許多慈善可書。余與先生不相識，而其兄少逸則昔曾同官京師者也。

七月二十二日辛丑星期日晴半陰 八十至八十五度
寄蔚芝訊。

七月二十三日壬寅星期一晴午後雨陰 八十二至八十六度
壽民弟擬輓幼禾一聯，就余商酌，為之改易數字。聯云，人才稱難弟難兄，樂育善，繼承久矣，師門推伯子。文望及江南江北，噩音傳，倉卒傷哉，學校失儀型。

七月二十四日癸卯星期二晴夜雨 七十七至八十二度
幼禾三七家祭，往吊之并為題主。

七月二十五日甲辰星期三陰小雨晴 八十二至八十七度
晨起，料理雜物。巳刻，上朝陽船。未初，至堡西外廬。

七月二十六日乙巳星期四晴 八十三至八十九度
接蘇庭函，並承購寄『塩政雜誌』四冊。

七月二十七日丙午星期五晴 八十二至八十七度
寄吳氏外舅信，言閏七月中旬當挈飴兒赴蘇云。笠山寄余勸工銀行章程並招股簡章。

七月二十八日丁未星期六晴 八十一至八十五度
寄渭漁，蘇庭訊，言塩事。

【処暑】七月二十九日戊申星期日晴 八十二至八十七度
託施洗凡調查隣近戸口及年齡已届入学【之学】生。

閏七月初一日己酉星期一陰晴小雨 八十一至八十五度
寄思齊，芸生訊。

閏七月初二日庚戌星期二陰大風 八十一至八十三度
答周舜卿訊，並贈以百合十四斤，山藥十八斤。

閏七月初三日辛亥星期三陰大風 八十一至八十四度
調元回家。仍任蘇氏教誨，此間司帳暫託陳生鳳祥繼之。答謝俞涵青內姪倩訊，云，秦晋通家，忝聯葭誼，閩河遠道，未接芝儀。惟聞山右之循聲，久動野人之欽仰。月前先繼室之喪，辱荷幃聯寵錫，頃增蓬華光輝，高誼雲天，歿存同感。某習為農圃，小有田園，方思偕隱。頻年幸得孟光之同志，詎料悼亡再賦，又如奉倩之傷神。十載塵緣，一朝解脫。膳有熏爐粉鏡，動觸悲懷。對茲經案繩床，寂無生趣，遠承慰唁，寧不達觀。深感殷勤，宜伸謝悃，爰裁短簡，藉頌儷祺，諸惟澄照不備。

閏七月初四日壬子星期四晴 八十一至八十五度

閱『塩政雜誌』內有「蘇五属兼辦崇明塩業之真因」一則¹⁸⁰。蘇五属塩商把持壟斷之計，即此可見。

閏七月初五日癸丑星期五晴 八十一至八十六度

城內移來書箱，均排列於西廂北間。萃拔來，預備小学校開校事宜。

閏七月初六日甲寅星期六陰晚小雨雷 八十至八十七度

南沙租務，擬託施洗凡經理。洗凡在施瑞清家任教誨。因瑞清來，特與商之，允焉。

閏七月初七日乙卯星期日小雨陰 七十八九度

蘭墅函告日新布廠推黃子孚任經理，楚楠任營業兼技師，朱君文煥任監察兼庶務。

【陽歷九月一日】閏七月初八日丙辰星期一晴半陰 八十至八十五度

報載，汪大燮¹⁸¹，錢能訓¹⁸²等四十餘人，請將錢塘道属田賦，量予免減¹⁸³。是為金甸丞同年单独進京後，約集浙人籌議進行之第一次也。

閏七月初九日丁巳星期二雨大風 八十至八十三度

赴靜泉家吊喪，并為題主。

閏七月初十日戊午星期三大風陰 七十七至八十一度

求己小学開校，近隣學生二十餘名。午後，乘朝陽進城。五時，抵家。

閏七月十一日己未星期四陰小雨 七十七至七十九度

昨福瀛莊開市。經理顧伯言未來，一切由副經理魏志凌辦理。巳刻，到莊，與魏君略談。午刻，至陳穎符家，吊其太君喪，并為別几，挽陳太君一聯，云，大好門庭，玉樹全憑賢母植。無上福壽，瑤池合與衆僊歸。申刻，到第一醫院，晤蓉卿，桂冬，東甫，稚卿，冠生弟，會議添籌經費事。

閏七月十二日庚申星期五晴 七十八至八十二度

午刻，弔瞿佑邦夫人之喪，并為剔几，贈挽聯，云，藉彤管以彰，荆釵布裙多儉德。勸黃門毋慟，身衣手線報春暉。壽民弟持視挽靜泉一聯，余為之改削太半。聯云，算吾鄉有數槃才，公租君理，農會君興，況保衛城郭，責重海塘，共知籌畫勤勞，直以一身當艱鉅。嗟頻歲不離厄運【已多拂意】，疾病相纏，死亡相繼，詎奔走滬崇，親撻時疫，但願循環剝復，從茲闔第迓麻祥。

閏七月十三日辛酉星期六晴 七十九至八十三度

赴【滬】，寓振華旅館。亥刻，笠山，秀齋¹⁸⁴先後來譚。

閏七月十四日壬戌星期日晴 八十二至八十五度

搏九約至品香樓午餐。申刻，訪舜卿。酉刻，笠山約至新世界晚餐。

閏七月十五日癸亥星期一晴 八十三至八十六度

雲承來談。余留伊至倚虹樓午餐。并招笠山，未來。申刻，詣徐家匯，訪蔚芝，談次贈余『溪山老農年譜』¹⁸⁵兩部。余以一部轉贈雲承。酉刻，秀齋約至倚虹樓晚餐。

【白露】閏七月十六日甲子星期二黎明雨陰 八十至八十四度

辰刻，龐芝符¹⁸⁶來，談請派員修治太湖事。十二時，雲承約到倚虹樓午餐。五時，答訪芝符，未值。六時，舜卿約到一枝香晚餐。

閏七月十七日乙丑星期三陰晚晴 七十九至八十三度

乘九時十分快車，赴蘇。午正，至吳氏外舅處。

閏七月十八日丙寅星期四晴 七十三至七十九度

午後，訪松岑談兩刻許。訪穎芝，未值。亥刻，繕寄笠山，芝符訊。

閏七月十九日丁卯星期五晴 七十二至七十九度

巳刻，訪費仲深。午刻，買棹出閩門，舟次午膳。未刻，到寒山寺略坐。巡棹，訪王企華¹⁸⁷於農業學校。申刻，至西園，啜茗於放生池畔。歸來

已傍晚矣。

閏七月二十日戊辰星期六晴 七十二至七十九度

已刻，訪穎芝，示以請願減賦呈稿，許列名焉。

閏七月二十一日己巳星期日半陰 七十一至七十八度

已刻，答訪宗受于新蘇台旅館。適笠山甫從上海來，略談。旋進城，訪潘濟丈，錢強齋。午刻，至松岑處便飯。受于，笠山均在座。商酌通訊蘇浙各屬紳耆函稿。申刻，散婦。答地山訊。

閏七月廿二日庚午星期一晴半陰 六十五至七十三度

蘇浙合請減賦呈稿，為松岑屬草，余略加校正。申刻，訪松岑面致之。又訪省立第二圖書館館長曹君根生略談，承以『統編書目』兩冊見遺。

閏七月廿三日辛未星期二晴 六十六至七十四度

已刻，訪穎芝，示以修正呈稿。下午，錢強齋，潘子義¹⁸⁸先後來談。

閏七月廿四日壬申星期三晴 六十七至七十五度

午刻，在閩門外鐵路飯店請客。到者為金松岑，錢強齋，金良卿，吳氏外舅，穎芝同年以外，潘子義，費仲深，沙鳳千未到。錢梅溪『履園叢話』第四卷論太湖水利甚詳，而尤注重建閘。略謂，水利之盈虛，全在乎節宣。沿海通潮港浦，歷代設官置閘，使江無淤澱，湖無泛溢，前人咸謂便利。惟元至順中有廢閘之議。閘者押也，視水之盈縮所以押之以節宣也。潮來則閉閘以澄江，潮去則開閘以洩水。其潮汐不及之水，又築堤岸而穿為斗門，蓄洩啓閉法亦如之，安有不便乎。又謂，古人治閘，自嘉興，松江而東至於海，遵海而北至於揚子，沿江而西至於潤州。一江一浦，大者閘，小者堰，所以外控海潮，而內防旱潦也。今惟於初開之時，務深而不務濶，且有石閘以衛之。既開之後，務通而不務塞，再設撩淺以導之，然後可囫永利。或謂，設閘之道有數善焉，如平時潮來則扃之，以禦其泥沙，潮去則開之，以刷其淤積。若歲旱則閉不啓，以蓄其流，以資灌溉。歲潦則啓而不閉，以導其水，以免停泓。且沿江設險，私販難以度越，因閘設官，盜賊易於斂迹。嚴啓閉之規，添疏導之卒，庶幾乎可也¹⁸⁹。按

此段論建閘，實為太湖流域水利最要關鍵。非然而徒事疏浚，一任潮汐通流，不數年必又淤淺矣。

閏七月廿五日癸酉星期四晴 六十七至七十五度

巳刻，答候潘子義，未值。閱『履園叢話』紀「米價」一則，云，康熙四十六年，蘇松常鎮四府大旱，是時米價每升七文，竟長至二十四文。次年大水，四十八年復大水，米價雖較前稍落，而每升亦尚十六七文。雍正乾隆初，米價每升十餘文。二十年蟲荒，四府相同，長至三十五六文，餓死者無算。後連歲豐稔，價漸復舊，然每升亦尚十四五文為常價也。至五十年大旱，則每升至五十六七文。自此以後，不論荒熟，總在廿七八至三十四五文之間為常價矣¹⁹⁰。按光緒初年亦祇每升三四十文，末年則五六十文，今則七八十文百文為常價。吾蘇地濱江海，交通至便，禁止出口，等於具文。北之京津，南之閩廣，米皆昂於吾蘇。況值各省告災，蘇亦歉收，米價之繼長增高，殆必然之勢也。曹君根蓀贈余自著詩文集四冊。

閏七月廿六日甲戌星期五晴 六十七至七十八度

午刻，應強齋招飲。松岑在座，出示笠山訊，述陶拙存¹⁹¹意公函發起人蘇浙各添三人。松岑擬請穎芝加入，屬余通知。其二人則宜興儲鏞農¹⁹²，常熟曾孟樸¹⁹³也。

閏七月廿七日乙亥星期六陰半晴 七十三至八十度

辰刻，乘小輪赴常熟。未正，抵南門，另雇小快船，駛傍西門內虞山之麓停泊，登岸散步入虞山福地坊。略有廟宇數處以外，荒煙蔓草，瓦礫成堆，想見洪楊兵燹以前之盛，迄今五六十年，未能規復。民生之凋敝與社會事業之不振，此亦一表徵也。涉山麓高處，一瞻遠景。夜，宿舟中。

閏七月廿八日丙子星期日晴 七十三至八十度

辰刻，挈館兒，乘肩輿，游虞山。先至言子墓，下輿上墓道瞻仰。墓係東向，形勢甚佳。旋至山北興福寺。又迤邐而上，至清涼寺。約在半山沿途，小松甚多。是處立森林苗圃，極為相宜。又上，至報國院。又越嶺而東，至維摩寺。登望海樓，則山之最高處也。北視南通諸山，隱約雲際。

長江自西而東，宛如匹練。命寺中備素麵，聊以充飢。食罷，取道山南，回舟已未正二刻矣。此行匆匆一過，未能稱幽覓勝，而略識山路上下之險易。北路雖迂遠而安隱，一路風景絕佳。南路陡峻敬側，余堅持，飴兒有不勝恐懼欲墜之意，及至平地始放心。儻異日再游此山，往返皆由北路為善。申刻，詣函書館。樓上有書目，係寫本，蓋編制未完者也。夜，仍宿舟中，泊南門外。

閏七月廿九日丁丑星期一晴 七十三至七十八度

晨九時，上小輪回蘇。下午一時半，抵閩門，易駁船送車站，乘二時五十五分快車赴無錫。車中晤陶君仞千。抵錫，寓新世界旅館。酉刻，仞千來，約余晚餐。談悉熊君秉三¹⁹⁴ 昨赴常熟，明日亦將來錫云。

閏七月三十日戊寅星期二晴 七十三至七十七度

午前十時，仞千與榮宗錦¹⁹⁵，德生¹⁹⁶ 昆玉遣小艇來，近至城北画舫。晤裘葆良¹⁹⁷，蔡益三，孫鶴卿¹⁹⁸，楊翰西¹⁹⁹，劉柏生，榮鄂生²⁰⁰，李國璋【德生之東床】，陸輔仁，高印川，馮妃懷諸君。未幾，熊秉三，賈果伯²⁰¹ 亦至。放船惠山之麓。午膳畢，相率上惠山，觀第二泉，啜茗於梅園。旋往寄暢園游覽。園為秦氏公產，中多古木，頗饒亭榭，池沼泉石之勝，憶余甲辰年來此，見荒蕪不堪涉足。今稍稍修葺，便覺幽雅絕俗。又至李文忠公祠，兩旁皆有別院。惟無人居住，几席生塵耳。傍晚返舟，駛傍城北。余率飴兒，回旅館。

【秋分】八月初一日己卯星期三晴 七十三至七十七度

翰西，兼三為東道主見招。十時，登画舫，秉三亦至。用汽油船，帶出梁溪，泊萬頃堂前。午膳畢，駛至翰西經營之埃實植果試驗場，場在山上，前臨太湖，所植水蜜桃及松樹居多。旋又至榮君德生經營之梅園，園占一小山嶺，地勢極佳。植梅樹千數百株，花時當不啻於鄧尉之香雪梅也。屋宇之布置，山路之繚繞，全用人功。因地勢成之高處，湖山在望，宛如画圖一幅。蘇之虎邱，杭之孤山，雖負盛名，而實際不如此山遠甚。薄暮返掉回城北。晚膳畢，以飴兒熟睡，乘肩輿返旅館，已十時矣。

八月初二日庚辰星期四晴 七十四至七十八度

晨九時，進城。譜伯唐若欽先生，數年未見，特往問安。今年七十有九，丰采尚好，步履亦健。略坐一刻，即興辭。訪翰西，兼三，未值。至公園，游覽一周。旋乘十一時二十八分快車，回蘇。午後一時，抵吳氏外舅處。

八月初三日辛巳星期五陰雨 七十三四度

蔚芝函示浙紳金甸老，盛萍老²⁰²論請願減賦書，並附來盛萍老致江浙水利聯合會意見書。大致注重在乍浦開河設閘，而不以疏浚太湖大舉工程為然。按疏洩太湖下游之水，就乍浦開河設閘計畫甚是。惟太湖受病已弥，吳江實當其衝，知之較悉，盛君竟謂無須浚湖，亦未免一偏之見耳。

八月初四日壬午星期六陰夜雨 七十一至七十六度

乘十二點二十三分快車赴滬。車上擁擠不堪。以頭二等合共一輛也。寓振華旅館。蓀庵初二到。蕭君送來蘇浙各紳復聯合會書，對於減賦治水間有異議，足資商榷。而贊成者，實居大多數。酉刻，蓀庵約至倚虹樓晚餐。

八月初五日癸未星期日雨陰 七十三至七十七度

午後，訪陶拙存於文監師路長春里。余仰慕拙存久，至今始得會晤。詢悉少余二歲，而鬚髮亦已蒼白。談兩刻許，告別。訪舜卿，未值。酉刻，秀齋約至復興園晚餐。

八月初六日甲申星期一小雨陰 七十二至七十五度

蘇侯²⁰³來談。余即約至倚虹樓午餐，並邀蓀庵，搏九。接蔚芝訊，言浙西減賦被阻事。余隨復一函，謂，宜持以堅忍，庶或有濟。嘉興王君寅清來言，金甸老不日來滬云。

八月初七日乙酉星期二陰 七十三至七十七度

笠山自江陰來，留午膳而去。下午，甸丞，拙存，受于，強齋先後來。亥刻，接芝符都門快訊。又大兒初二稟函自吳門轉來。

【陽歷十月一日】八月初八日丙戌星期三晴 七十一至七十六度
巳刻，訪甸丞同年於上海旅館，未值。鄭君笠山，儲君鑄農來談，留午膳。一時，至吳江同鄉會，蘇浙紳耆到者達五十人。議決治水借漕兩呈，略分先後，推舉代表，分起出發。未盡事宜，明日統議。酉刻，翔如約至一枝香晚餐。九時，偕松岑訪拙存，甸丞。

八月初九日丁亥星期四晴 七十二至七十六度
錢銘伯，邵厚夫²⁰⁴，錢慈念，孫詢芻，潘芸生，先後來。午膳後，至水利聯合會。三時，至吳江同鄉會，蘇浙同人各於呈尾簽名蓋章。酉刻，赴倚虹樓晚餐。

八月初十日戊子星期五陰半晴 七十三至七十七度
鑄農來。邀余至一品香午膳。與強齋同作主人。酉刻，沈田莘²⁰⁵約至一枝香晚餐。企柳自嘉定，立先自崇明，先後到此，同寓。

八月十一日己丑星期六陰 七十一至七十六度
詢芻約至大東旅社午餐。銘伯，企柳在座。酉刻，秀齋，董九約在倚虹樓晚餐。

八月十二日庚寅星期日晴 六十五至六十九度
拙存來談。企柳返嘉定。酉刻，余約王一亭²⁰⁶，沈田莘，陳藹士²⁰⁷，鄭笠山，金巨山，蔡翔如，程雲承，沈雲扉諸君在倚虹樓晚餐。

八月十三日辛卯星期一晴 六十四至六十九度
午後，游滬南半淞園。酉刻，赴巨山倚虹樓之約。

註

- 1) 小野寺史郎「地方史研究と王清穆日記」高田幸男・大澤肇編著『新史料からみる中国現代史——口述・電子化・地方文献』東方書店，2010年。
- 2) 1918年12月23日-1919年5月9日。
- 3) 俞樾（1821-1907）浙江省德清縣の人。初名は森，字は立甫，後に蔭甫。曲園と号す。1850年の進士。杭州の詒經精舎で長く教鞭を執った。陳玉

堂編著『中国近现代人物名号大辞典』（全編増訂本）杭州：浙江古籍出版社，2005年，923-924頁。

- 4) 唐・賈公彦『周礼疏』五十卷。
- 5) 徐珂『清稗類鈔』上海：商務印書館，1917年，藝術類。
- 6) 何焯。字は潤千，後に配瞻。義門先生と称される。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』（中国地方志集成・上海府県志輯10）上海：上海書店，1991年（初版1930年），卷十二。
- 7) 徐珂『清稗類鈔』鑑賞類。
- 8) 清・李元度『国朝先正事略』六十卷。
- 9) 施丹臣。戊午五月十九日を参照。
- 10) 王清鼎。字は漱銘，寿民。王清穆の堂弟。附貢生。捐納により兵馬司指揮。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』卷十三。
- 11) 宋・司馬光『涑水記聞』十六卷。
- 12) 宋・司馬光『資治通鑑』二百九十四卷。
- 13) 宋・朱熹「紫陽綱目」。
- 14) 清・呉乘権『綱鑑易知録』九十二卷。
- 15) 唐蔚芝「王丹揆先生伝」（一）（二）『申報』1941年9月2・4日，には「女孟賢，適施仲賢，未嫁卒」とあるのみで，王清穆にそれ以外に女兒がいたとは書かれていない。丙辰六月廿五・廿七日に「大女回南翔順道來省視，長孫增慶同來」「大女返南翔，增慶赴金氏外家同行」とあるため（「増慶」は王清穆の長孫である王炳章の乳名か），己未六月十八日に見える「大媳」と同じく，王清穆の長男である王毓斌の妻を指したもののか。
- 16) 朱萃拔。別字は如璋。塾師。戊午七月初六日を参照。
- 17) 徐珂『清稗類鈔』鑑賞類。
- 18) 沈雲扉（1890-1969）字は堯階。1909年，南京の江蘇陸軍小学入学。1907年より上海同济大学医科で学ぶ。1914年卒業，宝隆医院勤務。1915年帰郷，医院を開業。1916年8月，崇明県地方公款公産經理処から補助金を得て第一医院を設立。1919年，上海同徳医学院教務長。1921年から1927年まで，南洋大学校医を兼任。日中戦争期，上海紅十字会第十九傷兵医院に勤務。戦後，交通大学校医。1956年，西安交通大学衛生科長。上海市崇明県県志編纂委員会編『崇明県志』上海：上海人民出版社，1989年，909頁。
- 19) 徐珂『清稗類鈔』鑑賞類。
- 20) 同上。
- 21) 「一月三日大総統令」『時事新報』1919年1月7日。

- 22) 「錫山周氏宗譜序」王清穆・崔龍編『農隱廬文鈔』（近代中国史料叢刊統編第40輯395・396）台北：文海出版社，1977年（初版1939年），卷四。
- 23) 周廷弼（1852-1923）江蘇省無錫県の人。字は舜卿。耐庵，耐叟と号す。商部顧問，後，無錫で裕昌絲廠を経営。預備立憲公会董事。『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）809頁。
- 24) 王毓斌（?-1921）王清穆の長男。四品蔭生。中国銀行総司券処辦事員。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』卷十三。丙辰七月廿四日を参照。
- 25) 清・李元度『国朝先正事略』卷三十一。
- 26) 同上。
- 27) 鄭立三。字は笠山。江蘇省江陰県の人。「江浙水利聯合会紀錄」『江蘇水利協會雜誌』第5・6期，1919年6月。
- 28) 清・李元度『国朝先正事略』卷三十三。
- 29) 清・李元度『国朝先正事略』卷三十四。
- 30) 清・李元度『国朝先正事略』卷二十七。徐珂『清稗類鈔』性理類にも収録。
- 31) 同上。
- 32) 張廷楠。字は南榮。1918年，南通甲種農校卒業。丙辰六月初十日・戊午六月初六日を参照。
- 33) 菅原繁蔵『薄荷栽培及製造法』北洋堂，1905年。
- 34) 施同仁の子。丁巳七月二十九日を参照。
- 35) 孫毓修等輯『涵芬楼秘笈』上海：商務印書館，第三～六集，1917-1918年。
- 36) 『松下雜鈔』下。『涵芬楼秘笈』第三集に収録。
- 37) 清・彭孫貽『明朝紀事本末補編』卷一。『涵芬楼秘笈』第五集に収録。
- 38) 清・陳維安『海浜外史』三卷。『涵芬楼秘笈』第五集に収録。
- 39) 金天翮「江南水道述」『江蘇水利協會雜誌』第1期，1918年3月。
- 40) 龐樹典・袁承曾「江南水利計画説略」『江蘇水利協會雜誌』第1期，1918年3月。
- 41) 字は則先。江蘇省南通県の人。1914年，水利処測量員，劉河測務主任。1915年，調査測繪淞湖副主任。1917年，水利局測量科科員兼丙部測量事務所副主任。沈佺編『民国江南水利志』（中国水利要籍叢編第5輯43）台北：文海出版社，1971年（初版1922年）卷末。
- 42) 呉氏（?-1919）王清穆の二番目の妻。江蘇省呉県の人。唐蔚芝「王丹揆先生伝」を参照。
- 43) 灌雲武同挙一塵「江北行水今昔観」『江蘇水利協會雜誌』第1・2期，

1918年3・6月。

- 44) 清・傅沢洪『行水金鑑』百七十五卷。
- 45) 徐陶甫。己未八月二十七日を参照。
- 46) 宗嘉祿「治水芻義」『江蘇水利協会雑誌』第1期, 1918年3月。
- 47) 瞿賓九。農商部より南通棉業試験場に派遣。丙辰六月廿七日・庚申四月初十日を参照。
- 48) 「日本思想界之新潮流」『時事新報』1919年2月5日。
- 49) 汪鳳梁(1857-1919)か。江蘇省元和県の人。1890年の進士。汪鳳藻の弟, 汪東・汪榮宝の叔父。劉長煥「汪東先生年表簡編」『貴州教育学院学报(社会科学)』第24巻第11期, 2008年11月。
- 50) 張相文「導淮一夕談」『江蘇水利協会雑誌』第2期, 1918年6月。
- 51) 宗嘉祿「淮河路線議」『江蘇水利協会雑誌』第2期, 1918年6月。
- 52) 「張齋公癸丑導淮計畫宣告書」『江蘇水利協会雑誌』第2期, 1918年6月。
- 53) 張謇(1853-1926)字は季直。齋翁, 齋庵と号す。江蘇省南通県の人。呉長慶の幕僚を経て, 1894年, 状元で科挙及第。1902年, 南通州師範学校, 女子師範学校を設立。呂四塩業公司, 油廠, 麵粉廠, 漁業公司等を經營。日本を視察。商部頭等顧問官, 預備立憲公会副会長, 江蘇教育總會會長, 江蘇諮議局議長等を務める。辛亥革命後, 統一党, 次いで共和党理事。1913年, 督辦導淮事宜, 全国水利総裁, 農商総長。晩年は南通で地方事業に参与。華成塩壘公司, 大生紗廠, 広生椎油公司, 復興麵粉公司, 資生鉄冶公司, 大達輪船公司, 淮海実業銀行等を經營。徐友春主編『民国人物大辞典』(増訂版)石家莊:河北人民出版社, 2007年, 1754頁。
- 54) 君勳「海外中華民族之前途」『時事新報』1919年2月13日。
- 55) 「国際同盟之草約」『時事新報』1919年2月13日。
- 56) 「淮南塩商之呼吁」『時事新報』1919年2月16・17日。
- 57) 王清穆の二男である王毓橋の乳名か。唐蔚芝「王丹揆先生伝」を参照。
- 58) 張一鵬(1873-?)江蘇省呉県の人。字は雲搏。兄の張一慶と蘇州で蘇学会を創立。日本に留学, 『法政雑誌』を編集。辛亥革命後, 各省都督府代表連合会代表, 司法次長兼代理総長, 江西省財政庁庁長。『中国近現代人物名号大辞典』(全編増訂本)579頁。
- 59) 「張一鵬監視焚土之呈文」『時事新報』1919年2月21日。
- 60) 宋承家(?-1920)字は蓀菴。1900年, 副榜貢。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』巻十三。
- 61) 王清穆が1907年に設立した崇明輪船公司の運航する汽船である朝陽号。

上海市崇明県志編纂委員会編『崇明県志』447頁。

- 62) 施立先。堂兄に施啓華（閏秋），堂弟に施景華（友先）・施棟（象先）がいる。
- 63) 施棟。字は象先。捐納により広東候補巡檢，署番禺県県丞。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』卷十三。堂兄に施啓華（閏秋），施立先，施景華（友先）がいる。
- 64) 嚴師孟。字は亜鄒。増貢生。捐納により貴州独山州州同。『崇明県志』分纂。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』卷十三。
- 65) 張模。字は鷺翹。六品蔭生，湖北襄陽荊州府通判。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』卷十三。
- 66) 施啓華。字は桐封，閏秋と号す。己未九月初五日には「施閏秋烈先」とある。捐納により浙江で同知，次いで湖北で運同銜。総督張之洞が善後局に登用。署宜昌通判，後に武昌で知府に昇進。1904年，署徳安府事。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』卷十一。堂弟に施立先・施景華（友先）・施棟（象先）がいる。
- 67) 錢樂邨。丁巳六月初五日を参照。
- 68) 陸燦昕（1869-1929）字は賓谷。増広生。『崇明県志』分纂。太倉中学学監，県第一小学校校長を務める。1926年，県教育局長。『崇明県志稿』卷五，上海市地方史辦公室・上海市崇明県檔案局編『上海府県旧志叢書・崇明県卷』上海：上海古籍出版社，2011年，2230頁。
- 69) 曹炳麟（1872-1938）字は吟秋。1902年，挙人。1905年，安徽で知県候補。辛亥革命後，帰郷。1914年に崇明中学を創設，十余年に渡り校長を務める。1919年より県志編纂に従事。上海市崇明県志編纂委員会編『崇明県志』896頁。
- 70) 「南北和議竟至決裂」「南方代表宣言停止和議」『時事新報』1919年3月3日。
- 71) 湯化龍（1874-1918）字は済武。湖北省蕪水県の人。1904年の進士。1906年，日本留学。1908年，法政大学を卒業。湖北諮議局議長などを務める。武昌蜂起後，湖北省軍政府民政総長。民国成立後，共和党幹事長，進歩党理事，衆議院議長，教育総長等を歴任。1914年辞職。1916年，衆議院議長に復職。梁啓超らと憲法研究会を組織，『晨鐘報』を発行。1917年，内務総長に就任，後辞職。訪問先のカナダで国民党員により暗殺。『民国人物大辞典』（増訂版）2062-2063頁。
- 72) 「湯公在波士頓中華商会之演説辞」（七）『時事新報』1919年3月4日。
- 73) 「湯公在波士頓中華商会之演説辞」（八）（九）『時事新報』1919年3月

5・6日。

- 74) 『礼記』大学第四十二。
- 75) 『礼記』中庸第三十一。
- 76) 『論語』雍也第六。
- 77) 『孟子』尽心上第十四。
- 78) 「湯公在波士頓中華商会之演説辞」(十)『時事新報』1919年3月7日。
- 79) 黄炳蔚「論南北統一」『時事新報』1919年3月8日。
- 80) 「湯公在波士頓中華商会之演説辞」(十一)『時事新報』1919年3月8日。
- 81) 「代地方公団擬呈塩務署文」「崇明塩区応帰両准議」『農隱廬文鈔』卷二。
- 82) 「湯公在波士頓中華商会之演説辞」(三)(四)『時事新報』1919年3月1・2日。
- 83) 周鳳岐「裁減兵額及改良軍制之意見(続)」『時事新報』1919年3月12日。
- 84) 高維崑「我之鐵路統一觀」『時事新報』1919年3月14・15日。
- 85) 「五年來之中国塩政」『時事新報』1919年3月15日。
- 86) 陸夢熊(1881-1940)字は渭漁。江蘇省崇明県の人。早稲田大学を卒業。帰国後、商科進士、翰林院檢討に任ぜられる。1912年から交通部参事、京漢鐵路副局長、郵電学校校長などを歴任。1922年以後、数度交通部長・次長に就任。1929年以後、膠濟鐵路管理委員会委員。1939年、華北政務委員会実業部次長。『民国人物大辞典』(増訂版)1355頁。
- 87) 沈維賢(1865-1940)字は思齊、師徐。江蘇省松江県の人。1891年、挙人。江蘇諮議局議員。民国以後は江蘇省議会議長、参議院議員などを務める。『民国人物大辞典』(増訂本)746頁。
- 88) 潘澄鑑。字は芸生。浙江省呉興県の人。「江浙水利聯合会紀録」『江蘇水利協會雜誌』第5・6期、1919年6月。
- 89) 杜少如(1886-1944)杜廷珍とも。1919年、姚錫舟らと大通紗廠を創設。1922年、施丹甫らと永裕輪船公司を設立。1924年、施丹甫らと東明電気股份公司を設立。1930年、大同商業銀行を設立。1932年、王清穆らと富安紗廠を設立。上海市崇明県志編纂委員会編『崇明県志』898頁。
- 90) 龔清沚。字は澧澄。捐納により湖北試用県丞。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』卷十三。
- 91) 南園「毛西河駁四書集註之謬」『中華新報』1919年3月18日。
- 92) 黄以霖(1857-1932)字は伯雨。江蘇省宿遷県の人。1891年、挙人。湖北鄖陽知府、候補道、署湖南提学使兼署布政使等を歴任。張謇らと宿遷に耀徐玻璃廠・永豊麵粉廠を設立。辛亥革命後、上海で華洋義賑会を設立。

『民国人物大辞典』（増訂本）1580頁。

- 93) 唐文治（1865-1954）字は穎侯，蔚芝と号す。晩年は茹経と号す。江蘇省太倉県の人。1892年の進士。戸部主事。1898年，総理衙門章京。1901年，那桐の随員として日本に派遣。外務部への改組に伴い外務部権樞司主事。1902年，載振の随員としてイギリスに派遣。1903年，商部右丞，次いで左丞。1906年，工商部への改組に伴い左侍郎，署尚書。まもなく辞職。1907年，上海高等実業学堂監督。1908年，江蘇教育總會会長に当選。1920年より国学専修館主講。『民国人物大辞典』（増訂本）1316頁。
- 94) 盛邦采。字は亮周。浙江省嘉興県の人。「江浙水利聯合会紀錄」『江蘇水利協會雜誌』第5・6期，1919年6月。
- 95) 『嘉興請減賦稅文牘』1915年。
- 96) 金蓉鏡『均賦餘議，雜稿』1917年。
- 97) 唐文治『大学新読本』。
- 98) 龔劍秋か。庚申正月十七日を参照。
- 99) 徐樹馨。字は蘭墅。1911年，日本法政科大学卒業，挙人。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』卷十三。
- 100) 王家襄（1872-1928）字は幼山。浙江省山陰県の人。1904年，日本留学。1906年帰国，浙江全省巡警參議，紹興府巡警総理，浙江警察学堂教習，浙江全省警察総辦，浙江省諮議局議員。1911年，吉林巡警総辦。辛亥革命後，共和党理事，進歩党党務部部长，參議院議長，憲法會議議長。1916年より河南中福鉞務督辦。『民国人物大辞典』（増訂本）139頁。
- 101) 張允高。字は藻翔。直隸豊潤県の人。1919年4月から1920年4月まで崇明県知事。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』附編卷一。
- 102) 張允言。字は伯訥。直隸豊潤県の人。1913年，杭州関監督。1915年，署山海関監督。劉寿林・萬仁元・王玉文・孔慶泰編『民国職官年表』北京：中華書局，1995年，1373頁。
- 103) 「江蘇省呉県等二十五県改食淮塩議略」『中華新報』1919年3月25・26日。
- 104) 「蔡鶴卿答林琴南書」『時事新報』1919年3月25日。
- 105) 『儀礼』喪服第十一。
- 106) 『左伝』昭公七年。
- 107) 『孟子』滕文公上第五。
- 108) 「馬凱君之論中国事」『時事新報』1919年3月27日。
- 109) 宋・朱熹「婺州金華県社倉記」。
- 110) 「浚浦工程局之大計画」『時事新報』1919年3月31日。

- 111) 「巴黎通信」『中華新報』1919年3月31日。
- 112) 徐蘇庭。丁巳閏二月廿八日を参照。
- 113) 『通州興辦實業之歷史』南通：翰墨林印書局，1910年。
- 114) 『南通地方自治十九年之成績』南通：翰墨林印書局，1915年。
- 115) 『奮翁墾牧手牒』南通：通海墾牧公司，1918年。
- 116) 王清泰（1856-1919）字は彙初。王清穆の堂兄。附貢生。捐納により署常州教諭。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』卷十三。
- 117) 施祖恒（1872-1937）字は桂冬。廩貢生。『崇明県志』分纂。県立高等小学，尚志女学，太倉中学などを経て，辛亥革命後は県視学，県教育局総務課長を務める。『崇明県志稿』卷五，上海市地方史辦公室・上海市崇明県檔案局編『上海府県旧志叢書・崇明県卷』2229頁。
- 118) 蘇人權（1871-1932）字は稚卿。附生。画家。江蘇諮議局議員。1919年，『新崇明報』を創刊。1920年，崇明県教育会会長。『崇明県志』絵図。上海市崇明県志編纂委員会編『崇明県志』895頁。
- 119) 馮芳澍。字は耀香。妻が呉氏の末妹のため，王清穆とは相婚の關係に当たる。丁巳閏二月初二日を参照。
- 120) 馮閻模。字は悦甫。附貢生。辟薦により陸軍部主事。『崇明県志』分校。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』卷十三。
- 121) 金天翮（1874-1947）字は松岑，鶴望と号す。江蘇省呉江県の人。1903年，蔡元培の中国教育会及び愛国学社に参加。鄒容『革命軍』の出版を援助。また『三十三年落花夢』等を翻訳出版。1912年，江蘇省議會議員。1923年，呉江県教育局局長。1927年，江南水利局局長。1932年，中国国学会を組織。1938年，上海光華大学中文系教授。呉江市地方志編纂委員会編『呉江県志』南京：江蘇科学技術出版社，1994年，840頁。
- 122) 陳企柳。庚申三月二十二日を参照。
- 123) 呉杜臣。杜丞とも。王清穆の妻である呉氏の兄弟の子。丁巳正月初六日を参照。
- 124) 『明史』卷八十八，志第六十四，河渠六，直省水利。
- 125) 同上。
- 126) 錢応清。字は鏡平。1906年，日本政科大学卒業，挙人。主事。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』卷十三。
- 127) 君勳「国際大同盟条約略釈（続）」『時事新報』1919年4月20日。
- 128) 張督（1851-1939）字は叔儼，退庵と号す。江蘇省南通県の人。1879年，捐納により県丞。知県等を歴任。1904年帰郷，以後，弟の張審と大生紗廠等を経営。『民国人物大辞典』（増訂版）1749頁。

- 129) 錢淦（1875-1922）字は印霞，真如人。江蘇省宝山区の人。1904年の進士。日本に留学。1907年，法政大学を卒業。帰国後，宝山区清丈局長。辛亥革命後，宝山区知事。1917年，江蘇省議會議員，『宝山区志』総纂。後，宝山区交通事務局長。上海市宝山区地方志編纂委員會編『上海市宝山区志』上海：上海人民出版社，1992年，1033頁。
- 130) 徐成祺（1862-1939）字は引恬，伯庚・不更と号す。県庠生。1906年，尚志女塾を創設。1908年，日本の女学を視察。1919年10月，国語研究会を發起，拼音字母の普及を訴える。翌年，同会主任。上海市崇明県志編纂委員會編『崇明県志』896-897頁。
- 131) 『蘇州府志』（同治）卷九，水利一。
- 132) 同上。
- 133) 『論語』子張第十九。
- 134) 「與永豊令論閉糴書」周樹槐撰『壯学齋文集』1852年，卷八。盛康輯『皇朝經世文統編』1897年，卷四十五，戸政十七，荒政中などにも収録。
- 135) 「答陳雪漁論西糴書」彭泰来『昨夢齋文集』1865年，卷二。
- 136) 咎元愷。字は勝存。県学生。崇実公学を創設，後，城東小学に改組。勸学所長，第一高等小学校長などを務める。『崇明県志稿』卷五，上海市地方史辦公室・上海市崇明県檔案局編『上海府県旧志叢書・崇明県卷』2230頁。
- 137) 「説米一」（己未）『農隱廬文鈔』卷一。
- 138) 「塩署稽核所会辦來滬」『時事新報』1919年5月7日。
- 139) 1919年5月10日-1919年10月6日。
- 140) 李象鵬「平餉禁囤議」盛康輯『皇朝經世文統編』卷四十六，戸政十八，荒政下。
- 141) 金蓉鏡（1855-1929）字は香巖，甸丞と号す。浙江省秀水県の人。1889年の進士。工部鉛子庫都水司主事，湖南省郴州・靖州直隸州知州，永順府知府，公部窯廠監督，軍機処章京などを歴任。靖州知州在任中，中国同盟会湖南分会会長禹之謨を処刑している。辛亥革命後，帰郷。1919年，太湖浚渫事業を發起。1920年，政府に嘉興・嘉善・平湖・崇徳・吳興・徳清六県の減賦を請願。嘉興市志編纂委員會編『嘉興市志』北京：中国書籍出版社，1997年，2248-2249頁。
- 142) 施同仁（1857-1926）字は礼齋。「施礼齋先生家伝」『農隱廬文鈔』卷四。
- 143) 鮑隱「致鶴望書（論江流）」『江蘇水利協會雜誌』第4期，1919年1月。
- 144) 『蘇州府志』（同治）卷九，水利一。
- 145) 「絵地図議」馮桂芬『校邠廬抗議』1861年，卷一。葛士濬輯『皇朝經

- 世文統編』1888年，卷二十八，戸政五，疆域上などにも収録。
- 146) 「江蘇減賦記」馮桂芬『顯志堂稿』1876年，卷四。葛士濬輯『皇朝經世文統編』卷三十一，戸政八，賦役中などにも収録。
- 147) 前掲「江蘇減賦記」に言及がある。
- 148) 傅增湘(1872-1949)字は沅叔，潤沅。薑庵と号す。四川省江安県の人。1898年の進士。翰林院編修，国史館協修，貴州学政，直隸道員等。日本の学務を視察，帰国後，直隸提学使，北京女子師範伝習所(後，京師女子師範学堂)所長。1917年，教育総長。1920年，免職。1927年，国立故宫博物院図書館長。『民国人物大辞典』(増訂版)2017頁。
- 149) 「張季直致北京政府電」『時事新報』1925年5月25日。
- 150) 徐世昌(1855-1939)字は卜五。菊人，東海，韜齋と号す。直隸天津県の人。1886年の進士。袁世凱の下，新建陸軍營務処総辦を務める。1903年，商部右丞。以後，署兵部左侍郎，会辦練兵大臣，巡警部尚書，民政部尚書，東三省総督，郵伝部尚書，督辦津浦鉄路大臣，憲政編查館大臣，内閣協理大臣等を歴任。1914年，国务卿。1918年，大総統。1922年，辞職。『民国人物大辞典』(増訂版)1206-1207頁。
- 151) 「張季直致齊省長電」『時事新報』1925年5月25日。
- 152) 齊耀珊(1865-?)字は照巖。吉林省伊通県の人。1890年の進士。1918年，浙江省省長。1920年，山東省省長。1921年，商務銀行総裁，農商総長兼署教育総長。1922年，免職，農商銀行総裁。『民国人物大辞典』(増訂版)2317頁。
- 153) 施景華(?-1920)字は友先。捐納により広東候補知県，署鬱南県知事。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』卷十三。堂兄に施啓華(閏秋)・施立先，堂弟に施棟(象先)がいる。
- 154) 呉蔭培(1851-1931)字は樹百，穎芝と号す。江蘇省呉県の人。1890年，第一甲三名(探花)で進士及第。翰林院編修，京兆試・礼部試・福建郷試考官を歴任。1905年，日本考察。帰国後，廉州府・潮州府・貴州鎮遠府知府などを歴任。辛亥革命後，帰郷。1916年，修志局を設立，『呉県志』総纂に推挙される。呉県地方志編纂委員会編『呉県志』上海：上海古籍出版社，1994年，1136-1137頁。丙辰九月十二日などで「穎芝内兄」としているため，王清穆の妻の呉氏は呉蔭培の堂妹と思われる。
- 155) 銭崇固。字は強齋。江蘇省呉江県の人。江蘇省議会議長，後，律師。『中国近現代人物名号大辞典』(全編増訂本)1011-1012頁。
- 156) 費樹蔚(1883-1935)字は仲深，韋齋と号す。江蘇省呉江県の人。袁世凱の幕僚を経て，郵伝部員外郎，京漢鉄路理事等。後，蘇州電気公司董事

- 長，江豊銀行董事長，信孚銀行董事長，蘇州総商会特別会董等。『民国人物大辞典』（増訂版）2099頁。
- 157) 劉柏森（1869-1940）江蘇省武進県の人。原名は樹森，字は柏生。上海の信義洋行，茂生洋行に勤務。1899年，日本で石炭の運輸販売を視察。帰国後，清朝に武器を販売。後，慎泰恒を設立，石炭の販売・輸出に従事。盛宣懷らと三星香煙公司を，張謇らと大維公司を設立。また宝源紙廠，宝通，宝成紗廠等を経営。榮宗敬らと商学会を組織。1917年，全国華商紗廠連合会を組織。『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）275頁。
- 158) 沈慶鴻（1869-1947）叔遠と号す。筆名は心工。南洋公学に学ぶ。日本で教育を視察。楽歌の編集を始める。1911年から南洋公学附属小学校校長を27年間務め，務本女塾，龍門師範，滬学会などで楽歌を教える。『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）554頁。
- 159) 左宗棠（1812-1885）字は季高，補存。諡は文襄。湖南省湘陰県の人。太平天国，捻軍，回民蜂起を鎮圧。後，浙江巡撫，閩浙，陝甘，両江総督を歴任。『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）134頁。
- 160) 李鴻章（1823-1901）字は漸甫。少荃，少泉，儀齋，儀叟と号す。諡は文忠。安徽省合肥県の人。1847年の進士。曾國藩の幕僚を経て淮軍を組織，河南で太平天国と捻軍を鎮圧。後，両江，湖広，両粵，直隸等各地の督撫，北洋大臣を歴任。『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）448-449頁。
- 161) 前掲「嘉興求減浮糧書」に引用されている。
- 162) 段祺瑞（1865-1936）字は芝泉。安徽省合肥県の人。袁世凱の下，新建陸軍に参加。辛亥革命後，陸軍総長。1913年，國務總理代理。1916年，國務總理。1920年，安直戦争に敗れ，下野。1924年，第二次奉直戦争後，張作霖の下で臨時執政。善後会議を招集。1926年，下野。『民国人物大辞典』（増訂版）1026-1027頁。
- 163) 「張季直致徐段書」『時事新報』1919年6月14日。
- 164) 「衡州呉佩孚通電」『時事新報』1919年6月13日。
- 165) 盛廷華。1919年4月から1920年4月まで崇明県二等警佐。錦泉は字か。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』附編卷一。
- 166) 陳受爵。江蘇省呉県の人。1919年4月から1920年4月まで崇明県一等警佐。讓之は字か。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』附編卷一。
- 167) 張清樾。字は蔭公。1909年，日本法政科大学卒業，挙人。小京官。王清穆主修・曹炳麟総纂『崇明県志』卷十三。
- 168) 「張季直敬告全国学生書」『時事新報』1919年6月25日。

- 169) 張仁奎 (?-1944) 字は鏡湖。山東省滕県の人。清末、中国同盟会に加入。新軍蜂起に参加。南京臨時政府陸軍部第八旅旅長。第二革命後、第七十六路混成旅旅長。1917年、江蘇通海鎮守使。1923年、杰威將軍。『民国人物大辞典』（増訂版）1769-1770頁。
- 170) 林則徐（1785-1850）字は元撫，石麟，少穆。瑛村と号す。諡は文忠。福建省侯官県の人。1811年の進士。江蘇巡撫，湖広総督，兩広総督，署陝甘総督，陝西巡撫，雲貴総督等を歴任。『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）750頁。
- 171) 西神山人輯『談塩叢報論説彙編』。
- 172) 蔣乃曾。字は省菴。江蘇省太倉県の人。「江浙水利聯合会紀錄」『江蘇水利協會雜誌』第5・6期，1919年6月。
- 173) 施経杰。字は少農。捐納により法部学習主事。『崇明県志』卷十三。
- 174) 王榮章（1919-?）王清穆の長男である王毓斌の三男。唐蔚芝「王丹揆先生伝」を参照。
- 175) 清・呉嘉淦『儀宋堂詩集』十卷。
- 176) 呉宗濂（1856-1933）字は挹清，景周と号す。江蘇省嘉定県の人。上海広方言館，北京同文館に学び，駐英，駐俄使館翻訳，上海広方言館法語教習，駐法使館秘書，駐西班牙使館代辦，駐奧地利使館代辦等。1905年帰国，外務部左參議，次いで右丞。1909年，出使意大利欽差大臣。1914年帰国。1918年，參議院議員。1925年，上海法国市政會議議員。『民国人物大辞典』（増訂版）612頁。
- 177) 周夢顔輯『蘇松財賦考』昆山：昆山県參事会，1913年。
- 178) 鴨緑江采木公司編『鴨緑江采木公司創立第十週年營業彙編』1919年。
- 179) 郁鍾秀。字は重命。県学生。県第一小学校長を長く務める。『崇明県志稿』卷五，上海市地方史辦公室・上海市崇明県檔案局編『上海府県旧志叢書・崇明県卷』2230頁。
- 180) 「蘇五屬兼辦崇明塩業之真因」『塩政雜誌』第25期，1918年9月。
- 181) 汪大燮（1859-1929）浙江省錢塘県，または杭県の人。原名堯兪，字は伯唐，伯棠。1889年の挙人。内閣中書，翰林院侍読，戸部郎中，総理各国事務衙門章京を歴任。1902年，留日学生総監督。1905年駐英公使。翌年外務部右侍郎。1907年考察憲政大臣に任ぜられ，英独等を訪問。『英国憲政叢書』を著す。1910年駐日公使。1913年帰国，教育総長，平政院院長，參政院參政兼副院長，交通総長，外交総長，國務総理代理等を歴任。パリ講和會議外交後援会委員長。1922年國務総理兼財政総長。1925年外交委員会委員長。晩年は慈善事業に従事。弟に汪大鈞がいる。『中国近現

- 代人物名号大辞典』（全編増訂本）540頁。
- 182) 錢能訓（1869?-1924）浙江省嘉善県の人。字は幹丞，または幹臣。1898年の進士。編輯，御史，広西学政，刑部主事，員外郎，監察御史，巡警部左丞，奉天右参贊，陝西布政使，護理巡撫を歴任。辛亥革命後西安で革命党を鎮圧，清朝滅亡時に拳銃自殺未遂。以後，北京政府内務次長，約法会議議員，政事堂右丞，礼制館副總裁，平政院院長，内務総長，内閣総理を歴任。五四運動後，迫られて辞職。『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）1011頁。1919年11月，督辦太湖水利工程時宜。翌年8月辞職。『民国人物大辞典』（増訂版）2626頁。
- 183) 「北京電」『時事新報』1919年9月1日。
- 184) 黄秀齋。庚申正月二十四日を参照。
- 185) 王祖畛撰，王保憲撰附録統編『溪山老農年譜』鎮洋王氏溪山書屋，1918年。
- 186) 龐樹典。字は芝符。江蘇省常熟県の人。1914年，水利処調査員，局務主任。1915年，調査測繪淞渚正主任。1917年，水利局測量科科长兼丙部測量事務所正主任。沈佺編『民国江南水利志』巻末。
- 187) 王舜成（1877-1952）契華，後に企華と号す。江蘇省太倉県の人。京師大学堂から帝国大学農科に留学。1912年帰国，江蘇省立第二農業学校校長。1928年，太倉農村師範校長，無錫教育学院農業教育系教授。太倉県県志編纂委員会編『太倉県志』南京：江蘇人民出版社，1991年，895頁。
- 188) 潘利毅。字は子義。附貢生。蘇常道尹公署主任。夏水，佐藤仁史記「清末民初蘇州の民紳層とその活動」三田史学会編『史学』第76巻第4号，2008年3月，15-17頁。
- 189) 清・錢詠『履園叢話』巻四。
- 190) 清・錢詠『履園叢話』巻一。
- 191) 陶葆廉（1862-1938）字は拙存。浙江省秀水県の人。陶模の子。優貢生。光緒末年，記名提学使。1902年，浙江大学堂総理代理。1908年，陸軍部軍機司郎中。1914年，浙江通志局分纂。1919年，太湖水利工程局会辦。『嘉興市志』2092-2093頁。
- 192) 儲南強（1876-1959）江蘇省宜興県の人。別名青綰，字は鏞農，簡翁，二洞老人と号する。江陽南菁書院を卒業。黄炎培・沙彦楷と同学。後，故郷で勸学処及び小学校を設立する。辛亥革命後に民政長に推薦され，後に南通に移り，堤防建設などに従事。三年後，南洋公学で国文教師を勤める。帰郷後，治水と宜興の市政，古跡の修復に携わる。『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）1227頁。

- 193) 曾樸 (1872-1935) 字は孟樸, 小木, 籀齋。筆名は東亜病夫。江蘇省常熟県の人。1891年の挙人。両江総督端方の幕僚を経て, 民国以後は省議會議員, 江蘇省官産処長, 財政庁長, 政務庁長等。江蘇省常熟市地方志編纂委員会編『江蘇省常熟市志』上海: 上海人民出版社, 1990年, 1093-1094頁。
- 194) 熊希齡 (1867-1937) 字は秉三。湖南省鳳凰県の人。1892年の進士。1898年, 変法運動に参加, 長沙に時務学堂, 南学会を組織, 『湘報』を発行。1900年, 渡日。帰国後, 華昌鋳務公司を設立。1905年, 二等参贊官として出洋五大臣に同行, 憲政を視察。帰国後, 奉天財政局・農工商局総辦, 江蘇農工商局総辦, 蘇属諮議局会辦, 寧属諮議局総辦, 奉天塩運使, 東三省屯懇局会辦等。辛亥革命後, 江蘇都督府財政司司長, 統一党理事。1912年, 財政総長。1913年, 國務總理。1916年, 辭職。1917年, 京畿一帶の水害に際し対処に尽力。以後, 湖南義賑督辦, 香山慈幼院院長, 順直水利委員会会長, 天津紅十字会名誉会董, 中華慈善団体全国連合会臨時正主任, 中華教育改進社社長, 水災義賑会会長, 湘災籌賑会名誉会長, 永定河工督辦等を務め, 水利・慈善事業に従事した。『民国人物大辞典』(増訂版) 2395頁。
- 195) 榮宗敬 (1873-1938) 宗錦とも。江蘇省無錫県の人。1896年, 上海で広生錢莊を設立。1900年, 保興麵粉廠を設立, 後, 茂新麵粉廠に改組。1905年, 振興紗廠を設立。1912年, 福新麵粉廠を設立。1916年, 申新紗廠を設立。『民国人物大辞典』(増訂本) 2330頁。
- 196) 榮宗鎰 (1875-1952) 字は徳生。江蘇省無錫県の人。1897年, 兄の宗敬の広生錢莊に入り, 無錫分莊經理。以後, 兄とともに福新・茂新麵粉廠, 振興・申新紗廠の經理や総理を務める。1918年, 江蘇省議會議員。1921年, 衆議院議員。1949年, 政治協商會議第一届全国委員会委員。『民国人物大辞典』(増訂本) 2331頁。
- 197) 裴廷梁 (1857-1943) 字は葆良。江蘇省無錫県の人。1892年, 挙人。1898年, 『無錫白話報』を創刊。無錫東林学堂校長。辛亥革命時, 無錫県県長。『民国人物大辞典』(増訂本) 2199頁。
- 198) 孫鳴圻 (1868-1928) 字は鶴卿。江蘇省無錫県の人。損納により道員。私立国学專修館を設立。無錫県商会会長, 無錫県自治協進支会会長, 四郷公所総董, 萬安市董, 水利研究会主任, 溥仁慈善会総董等。耀明電灯廠, 乾牲絲廠を設立。信誠商業儲蓄銀行無錫分行董事, 慶豊紗廠董事。『民国人物大辞典』(増訂本) 1549頁。
- 199) 楊寿楣 (1877-1954) 字は翰西。江蘇省無錫県の人。1902年, 挙人。

- 1908年、日本で陸軍軍制考察。辛亥革命後、無錫電話股份有限公司設立。1913年、業勤紗廠。1920年、無錫県商団会長。1921年、無錫県商会主席。『民国人物大辞典』（増訂本）2171頁。
- 200) 榮棣輝（1889-1967）字は鄂生。思庵と号す。江蘇省無錫県の人。1912年、榮徳生の文牘秘書。1918年、江蘇省議會議員。1921年、無錫申新三廠副經理。1924年、無錫開源電灯公司を設立。1925年、常州申新六廠經理。1931年、上海申新六廠經理。『民国人物大辞典』（増訂本）2331頁。
- 201) 賈士毅（1887-1965）字は果伯。荊齋と号す。江蘇省宜興県の人。1908年渡日、法政大学、明治大学で学ぶ。帰国後、蘇州法政専科学校で教鞭を執る。辛亥革命後、財政部編纂処主任、庫藏司司長、會計司司長、賦税司司長、全国官産処会辦、公債局坐辦、鎮江関監督等を歴任。1921年、ワシントン会議に参加。1927年、国民政府財政部賦税司司長、塩務処長、国立中央大学教授、国立中央政治大学教授。1932年、財政部常務次長。1933年、第二屆立法委員、湖北省財政庁庁長。戦後は台湾に渡る。『民国人物大辞典』（増訂本）2184-2185頁。
- 202) 盛沅（1845-1934）字は萍旨。浙江省嘉興県の人。1886年の進士。翰林院編修、刑部主事、山西省夏県知県、江蘇候補道などを歴任。帰郷後、嘉興府中学堂監督。嘉興商会を創設。1922年、乍浦の治水を省長沈金鑑に建議、董事会を組織、嘉興県の董事となる。1923年、嘉禾造紙廠を設立、董事となる。『嘉興市志』2249頁。
- 203) 陸蘇侯。己未十一月二十八日を参照。
- 204) 邵福瀛。字は厚夫。江蘇省常熟県の人。1913年、浜江関監督。1915年、湖海関監督。『民国職官年表』1315頁。
- 205) 沈沢春（1884-?）字は田莘。公粹、蘋翁と号す。浙江省呉興県の人。日本の明治大学卒業。清朝、民国の官に就く。『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）555頁。
- 206) 王震（1867-1938）字は一亭。浙江省呉興県の人。上海の銭莊などで働きながら学ぶ。1906年、予備立憲公会会董。日清汽船株式会社、大阪郵船株式会社、三井洋行上海製造絹糸社社長などを務める。『民国人物大辞典』（増訂版）58-59頁。
- 207) 陳其采（1880-1954）浙江省呉興県の人。字は藹士、涵廬と号す。別名は陳安。日本の士官学校卒業。長沙武備学堂総教習および監督兼新軍統帯、中枢軍諮府第三庁庁長兼保定軍校監督などを歴任。南京臨時政府諮議、後に帰郷して経武学堂で教鞭をとる。中国銀行浙江分行副行長となり、旅滬同郷会「湖社」を組織。1927年以後、浙江省政府委員兼財政庁庁長、国

民政府主計処主計長に任ぜられ、中央銀行・中国銀行、国民政府委員などを兼職。兄に陳其業・陳其美がいる。『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）689頁。